

(8) 貝 類

レッドリストに掲載された各貝類について、種ごとに形態的な特徴や分布、県内の状況等を解説した。記述の項目、内容等は以下の凡例のとおりとした。準絶滅危惧種、情報不足種についても、絶滅危惧種と同じ様式で記述した。

【掲載種の解説（貝類）に関する凡例】

【分類群名等】

対象種の本調査における分類群名、生息環境区分（陸産・淡水産・内湾産）、分類上の位置を示す目名、科名等を各頁左上に記述した。目・科の範囲、名称、配列は、原則として以下の文献に準拠した。

・陸産貝類・淡水産貝類

「日本産野生生物目録一本邦産野生動植物の種の現状－（無脊椎動物編Ⅲ）」（財団法人自然環境研究センター,1998）

・内湾産貝類（海産貝類）

「Catalogue and bibliography of the marine shell-bearing mollusca of Japan」(S.Higo et al.,1999)

「日本近海産貝類図鑑」（東海大学出版会,2000）

【評価区分】

対象種の愛知県における評価区分を各頁右上に記述した。参考として「貝類レッドリスト」（環境省,2007）の全国での評価区分も各頁右上に記述した。また、各評価区分に対応する英文略号も同じ場所に記述した。

【和名・学名】

対象種の和名及び学名を各頁上の枠内に記述した。和名及び学名は、原則として【分類群名等】の項に示した文献に準拠した。一部の異名は（ ）内に記述した。

【選定理由】

対象種を愛知県版レッドデータブック掲載種として選定した理由について記述した。

【形 態】

対象種の形態の概要を記述し、写真を掲載した（一部の種を除く）。

【分布の概要】

対象種の分布状況の概要を記述した。また、県内分布図については以下のとおりとした。

・陸産貝類

本調査及び平成9年度から平成13年度にかけての「レッドデータブックあいち2002 動物編」作成時の調査において、対象種の生息が現地調査、文献調査及び標本調査によって確認された地域のメッシュ（標準地域メッシュ・システムにおける5倍メッシュ）を県内分布図として掲載し、現地調査による確認地域、文献調査または標本調査による確認地域を●印で表示した。なお、同一メッシュ内に含まれる生息地が複数であっても1点として表示した。

・淡水産貝類

○印は1985年より2008年までの現地踏査の結果、生息を確認できた調査地点を示す。●印は1985年より1997年までの現地踏査の結果、生息を確認できたが、1998年から2008年までの調査で再び現地踏査した結果、生息が確認できなかった調査地点を示す。

・内湾産貝類（海産貝類を含む）

○印は1982年より2008年までの現地踏査した結果、生息が確認できたアシ原湿地、干潟の調査地点を示す。●印は1982年より2008年までの現地踏査した結果、生息は確認できなかったが、死殻が採集されたアシ原湿地、干潟の調査地点を示す。一部の調査地点では打ち上げられた貝類の調査も行ったので、潮下帯に生息する貝類も含まれる。□印は1994年より2008年までのドレッジを使用した潮下帯の調査の結果、生息が確認できた調査範囲を示す。■印は1994年より2008年までのドレッジを使用した潮下帯の調査の結果、生息は確認できなかったが、死殻が採集された

調査範囲を示す。

【生息地の環境 / 生態的特性】

対象種の生息地の環境条件及び生態的特性について記述した。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

対象種の愛知県における現在の生息状況、減少の要因等について記述した。

【保全上の留意点】

対象種を保全する上で留意すべき主な事項を記述した。

【特記事項】

以上の項目で記述できなかった事項を記述した。

【引用文献】

記述中に引用した文献を、著者、発行年、表題、掲載頁または総頁数、雑誌名または発行機関とその所在地の順に掲載した。

【関連文献】

対象種に関連する文献の内、代表的なものを、著者、発行年、表題、掲載頁または総頁数、雑誌名または発行機関とその所在地の順に掲載した。

【貝類 執筆者】

陸産貝類：木村昭一・原田一夫

淡水産・内湾産貝類：木村昭一

【貝類 調査協力者】

調査にあたり多くの方に協力していただいたが、次の方々に現地調査、標本提供、資料参照等で協力していただいた。

浅井 功	浅香智也	伊澤伸恵	大島寛俊	河合秀高	大平仁夫	小鹿 亨
木村仁美	木村妙子	河辺訓受	久保弘文	佐藤達也	出口 敏	中山 清
永井 貞	西村俊明	長谷川道明	早瀬善正	藤岡エリ子	松岡敬二	守谷茂樹
愛知県水産試験場	愛知県立三谷水産高等学校	蒲郡市立竹島水族館	汐川干潟を守る会			
竹島漁業協同組合	豊橋市立自然史博物館	豊浜漁業協同組合	名古屋貝類談話会			
東幡豆漁業協同組合	日間賀島漁業協同組合	三重大学生物資源学部	三谷漁業協同組合			

(敬称略)

カワネジガイ *Camptoceras hirasei* Walker**【選定理由】**

河川の下流域や平野部の湖沼のアシ帯やマコモ、カナダモなどの沈水植物群落のある場所に生息する(紀平,1990)。県内ではこのような場所はほとんど破壊されてしまった。河川下流域の環境がよく保全されていた1960年代にすでに本種は、生息地が少なく珍しい種と認識されていた(愛知科学教育センター,1967)。1970年後半より本種の記録された場所を再調査した例があるが(中山,1978: 木村,1994)、再発見されていない。小型種であるので見落としている可能性もあるが、40年近く本県では生息が確認されていないこと、県内の河川下流域の壊滅的な現状を考えると絶滅したと判断される。

【形態】

貝殻は非常に特異な形態で、殻は細長く、左巻きで螺管ははずれて巻く。殻高は6~10mmと小型。

【分布の概要】**【県内の分布】**

木曽川水系五条川の須ヶ口付近(愛知科学教育センター,1967)、豊川水系豊橋市蒲池(中山,1978)で生息していた記録があるが、現生息地はない。

【世界及び国内の分布】

日本固有種。本州から四国にかけて分布するが、産地は局限されている(湊,1993)。

【生息地の環境 / 生態的特性】

河川の下流域や平野部の湖沼のアシ帯やマコモ、カナダモなどの沈水植物群落のある場所に生息する(紀平,1990)。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

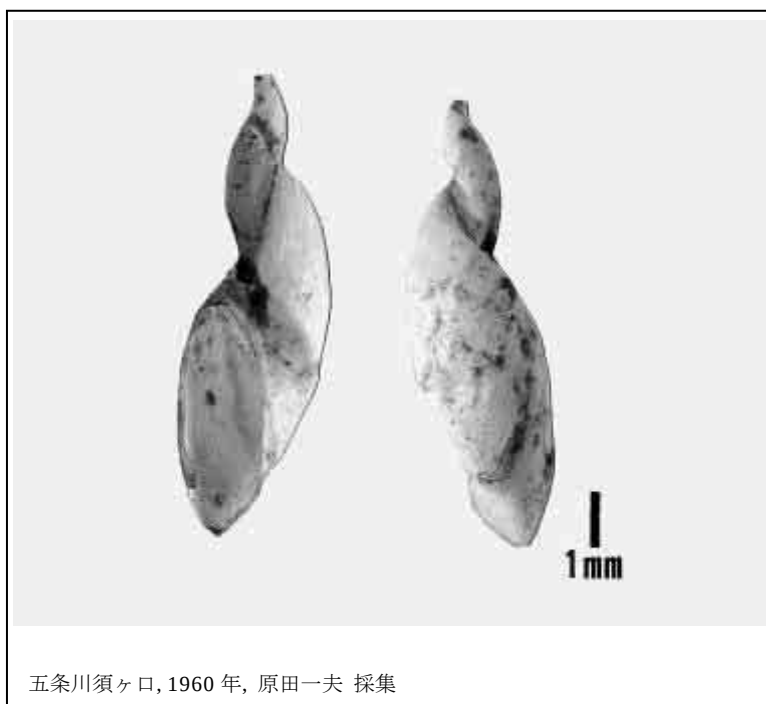
現生息地はない。

【特記事項】

水産資源保護協会(1995)では絶滅危惧にランクされている。岐阜県(2001)では絶滅危惧 I 類にランクされている。

【引用文献】

- 愛知県科学教育センター, 1967. 愛知の動物. 222pp.
岐阜県, 2001. 岐阜県の絶滅のおそれのある野生動物. 350pp.
紀平 肇, 1990. 琵琶湖淀川淡水貝類. 131pp. たたら書房.
木村昭一, 1994. 東海地方の淡水貝類相. 研究彙報(第33報): 14-34. 全国高等学校水産教育研究会.
湊 宏, 1993. 文献に見るカワネジガイの記録. 南紀生物, 35 (2): 154-156.
中山修一, 1978. 名古屋貝類談話会第7回淡水貝観察調査会の記. かきつばた, 4: 4-5. 名古屋貝類談話会.
水産資源保護協会, 1995. 軟体動物. 日本の希少な野生水産物に関する基礎資料(II), 131pp.



五条川須ヶ口, 1960年, 原田一夫 採集

県内分布図



ヒダリマキモノアラガイ *Culminella prashadi* (Clench)

【選定理由】

池沼でアシ帯やマコモ、カナダモなどの沈水植物群落のある場所に生息する (紀平, 1990)。カワネジガイと同時に採集されることが多く、同様の生息環境を好むと考えられる (水産資源保護協会, 1995)。河川下流部や平野部の湖沼の環境がよく保全されていた 1960 年代にすでに本種は生息地が少なく珍しい種と認識されていた (原田一夫氏私信)。1970 年後半より本種の記録された場所を再調査した例があるが (中山, 1978: 木村, 1994)、再発見されていない。小型種であるので見落としている可能性もあるが、40 年近く本県では生息が確認されていないこと、本県の河川下流域の壊滅的な現状を考えると絶滅したと判断される。



青森県六ヶ所村, 採集年月日不詳, 高桑弘 採集, 豊橋市自然史博物館所蔵

【形態】

殻高は約 6mm と小型で、殻は左巻き。カワネジガイの様に螺管がはずれて巻くことはないが、各螺層はねじれて、縫合部は強くくびれる。殻口は大きく広く開く。殻表には明瞭な螺条が多数ある。

【分布の概要】

【県内の分布】

木曽川水系五条川の須ヶ口付近 (原田一夫氏私信)、豊川水系豊橋市蒲池 (中山, 1978) で生息していた記録があるが、現生息地はない。

【世界及び国内の分布】

日本固有種。本州 (青森県から大阪府) に分布していたが、産地は局限され、近年の記録では生息地は 2 か所しか確認されていない (紀平, 1990: 水産資源保護協会, 1995)。

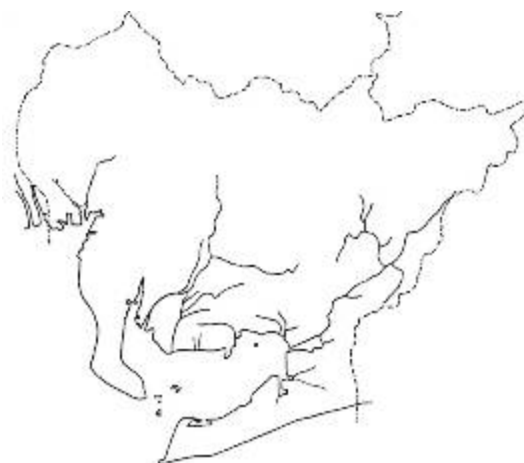
【生息地の環境 / 生態的特性】

河川の下流域や平野部の湖沼のアシ帯やマコモ、カナダモなどの沈水植物群落のある場所に生息する (紀平, 1990: 水産資源保護協会, 1995)。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

現生息地はない。

県内分布図



【特記事項】

水産資源保護協会 (1995) では絶滅危惧にランクされている。

【引用文献】

- 紀平 肇, 1990. 琵琶湖淀川淡水貝類. 131pp. たたら書房.
 木村昭一, 1994. 東海地方の淡水貝類相. 研究叢報(第 33 報): 14-34. 全国高等学校水産教育研究会.
 中山修一, 1978. 名古屋貝類談話会第 7 回淡水貝観察調査会の記. かきつばた, 4: 4-5. 名古屋貝類談話会.
 水産資源保護協会, 1995. 軟体動物. 日本の希少な野生水産物に関する基礎資料(Ⅱ), 131pp.

ヨコハマシジラガイ *Inversiunio yokohamensis* (Ihering)

【選定理由】

本種の属するイシガイ科貝類は、河川の下流域や平野部の用水路などの緩やかな流れで底質が砂泥底で水質の良い場所を生息場所としている。県内ではこのような場所はほとんど破壊されてしまったため、1960年代には広い分布を持ち多産したイシガイ科貝類全体の生息が危機的状況である。その中でも本種は特に水質の良い場所を好み、本種が生息する場所では他のイシガイ科貝類も多く見られる場合が多い(木村,1994: 木村・中西,1997)。県内では1970年代に絶滅したと思われる。

【形態】

日本産イシガイ科貝類としては中型で殻長は約7cm。殻長に比べて殻高がやや大きく輪郭は長方形。殻長付近から殻の中央部にかけて逆V字型のさざなみ状の彫刻がある。主歯、後側歯ともに強い。マツカサガイと酷似しているため長らく混同されていたが、木村・中西(1997)がグロキディウム幼生や貝殻の形態を検討した結果、マツカサガイ属ではなくオトコタテボシガイ属の1種として記録した。その後、Kondo(1998)の分類学的な再検討によってハコネシジラガイと種名が確定した。マツカサガイとは逆V字状の彫刻が弱く殻頂部では顆粒状になることから区別される。



豊川市年牟呂用水, 1970年頃, 中山清 採集

【分布の概要】

【県内の分布】

前述の通りマツカサガイと混同されていたため愛知県からの産出記録はない。豊橋市自然史博物館所蔵の高桑コレクションにマツカサガイと誤同定されたヨコハマシジラガイが存在する(豊橋市自然史博物館,1994)。この標本は中山清氏によって1970年頃に豊川市の牟呂用水で採集された。これを最後に絶滅したと思われる。1998年からの現地調査でも再発見を試みたが、本種が生息する可能性のある場所すら見つけることができなかった。

【国内の分布】

日本固有種。北海道から東海地方の河川下流域に分布する。湖沼には分布しないが、琵琶湖には近似種のオトコタテボシが分布する。また琵琶湖東岸の小河川から九州北部にかけて近似種のニセマツカサガイが分布する。

【生息地の環境 / 生態的特性】

上述したように河川の下流域や平野部の用水路などの緩やかな流れで底質が砂泥底で水質の良い場所を生息場所としている。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

上述したように県内では絶滅したと思われる。

【特記事項】

上述のようにオトコタテボシガイ属には3種あるが、それぞれは貝殻やグロキディウム幼生の形態が極めて近似していて、本当に独立種なのか疑問が残る。それらの分類学的再検討が望まれる。

千葉県(2000)では要保護生物にランクされている。岐阜県(2001)では情報不足とされている。

【引用文献】

- 岐阜県, 2001. 岐阜県の絶滅のおそれのある野生動物. 350pp.
木村昭一, 1994. 東海地方の淡水貝類相. 研究叢報(第33報): 14-34. 全国高等学校水産教育研究会.
木村昭一・中西尚史, 1997. 東海地方に分布するオトコタテボシ属の1種. ちりぼたん, 27(2): 41-48. 日本貝類学会.
Kondo, 1998. Revision of the Genus *Inversiunio* (Bivalvia: Unionidae), Venus 57(2): 85-94.
千葉県, 2000. 千葉県の保護上重要な野生生物 千葉県レッドデータブック動物編. 438pp.
豊橋市自然史博物館, 1994. 高桑弘氏寄贈貝類目録 1 二枚貝 Part2, 豊橋市自然史博物館資料集 第2号 31pp.

県内分布図



オバエボシ *Inversidens brandti* (Kobelt)

【選定理由】

本種の属するイシガイ科貝類は河川の下流域や平野部の用水路などの緩やかな流れで底質が砂泥底で水質の良い場所を生息場所としている。県内ではこのような場所はほとんど破壊されてしまったため、1960年代には広い分布を持ち多産したイシガイ科貝類全体の生息が危機的状況である。その中でも本種は特に水質の良い場所を好み、本種が生息する場所では他のイシガイ科貝類も多く見られる場合が多い(木村,1994: 木村・中西,1997)。県内では1970年代に絶滅したと思われる。

【形態】

日本産イシガイ科貝類としては最も小型種で殻長は約5cm。殻長に比べて殻高が大きく、輪郭は方形に近い。殻長付近には弱い縮緬状の彫刻がある。左右両殻とも三角形の1主歯を持ち、後側歯は強い。収足筋痕は前閉殻筋痕とつながる。



豊川市年牟呂用水, 1970年頃, 中山清 採集

【分布の概要】

【県内の分布】

1960年代中頃までは木曽川水系の日光川、五条川、矢作川水系、豊川水系などで生息が確認されていたが(愛知県科学教育センター,1967)、県内では河川下流域や平野部の小川や用水路の生息環境は壊滅的で1970年頃に豊川市の牟呂用水で生貝が採集されたのを最後に絶滅したと思われる。1998年からの現地調査でも再発見を試みたが本種が生息する可能性のある場所すら見つけることができなかった。

【世界及び国内の分布】

日本固有種。愛知県以西の本州、九州北部の河川下流域に分布する。通常湖沼には分布しないが、琵琶湖には分布する。

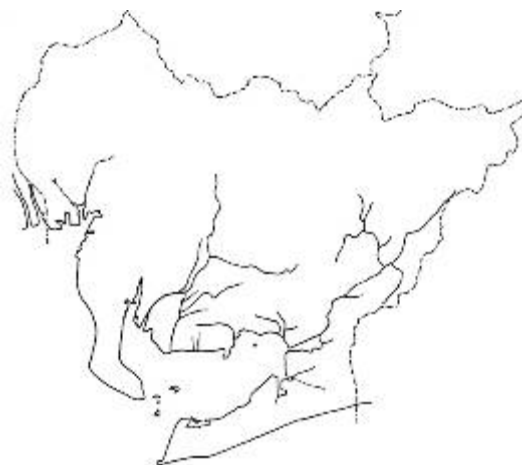
【生息地の環境 / 生態的特性】

上述したように河川の下流域や平野部の用水路などの緩やかな流れで底質が砂泥底で水質の良い場所を生息場所としている。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

上述したように県内では絶滅したと思われる。

県内分布図



【特記事項】

県内では絶滅してしまったが、本種の分布の東限に当たる。水産資源保護協会(1997)では「希少」とランクされ、本種の分布域全体での絶滅の危惧が指摘されている。岐阜県(2001)では絶滅危惧Ⅱ類にランクされている。

【引用文献】

- 愛知県科学教育センター, 1967. 愛知の動物. 222pp.
岐阜県, 2001. 岐阜県の絶滅のおそれのある野生動物. 350pp.
木村昭一, 1994. 東海地方の淡水貝類相. 研究叢報(第33報): 14-34. 全国高等学校水産教育研究会.
木村昭一・中西尚史, 1997. 東海地方に分布するオトコタテボシ属の1種. ちりぼたん, 27(2): 41-48. 日本貝類学会.
水産資源保護協会, 1997. 軟体動物. 日本の希少な野生水産物に関する基礎資料(IV), 126pp.

カタハガイ *Pseudodon omiensis* (Heimburg)

【選定理由】

本種の属するイシガイ科貝類は河川の下流域や平野部の用水路などの緩やかな流れで底質が砂泥底で水質の良い場所を生息場所としている。県内ではこのような場所はほとんど破壊されてしまったため、1960年代には広い分布を持ち多産したイシガイ科貝類全体の生息が危機的状況である。その中でも本種は特に水質の良い場所を好み、本種が生息する場所では他のイシガイ科貝類も多く見られる場合が多い(木村,1994: 木村・中西,1997)。県内では1970年代に絶滅したと思われる。

【形態】

日本産イシガイ科貝類としては中型で、生息場所によって大きさに変異があるが、本県産個体の殻長は約8cm。殻長は殻高に比べて大きく、輪郭は長方形に近い。殻幅が小さくやや膨らみは弱い。後側部にやや大きく強い分岐した肋状の彫刻がある。左右両殻ともやや強い三角形の1主歯を持つが後側歯は無い。この特徴が片歯(かたは)という和名の由来である。



三重県明和町, 1993年3月15日, 木村昭一 採集

【分布の概要】

【県内の分布】

1960年代中頃までは木曽川水系の日光川、五条川、矢作川水系、豊川水系などで生息が確認されていたが(愛知県科学教育センター,1967)、県内では河川下流域や平野部の小川や用水路の生息環境は壊滅的で、1970年頃に同所的に分布することが多いオバエボシガイと共に絶滅したと思われる。1998年からの現地調査でも再発見を試みたが、本種が生息する可能性のある場所すら見つけることができなかった。

【世界及び国内の分布】

日本固有種。愛知県以西の本州、九州北部の河川下流域に分布する。湖沼には分布しない。

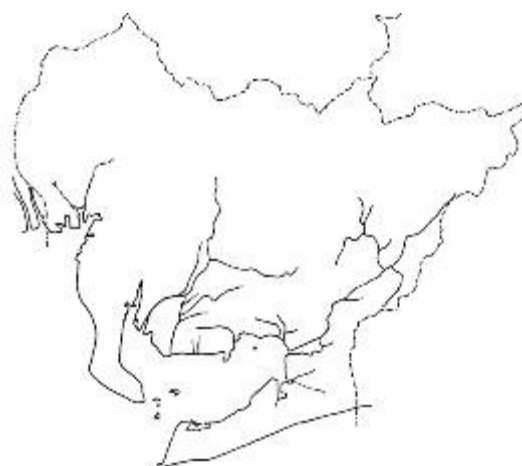
【生息地の環境 / 生態的特性】

上述したように河川の下流域や平野部の用水路などの緩やかな流れで底質が砂泥底で水質の良い場所を生息場所としている。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

上述したように県内では絶滅したと思われる。

県内分布図



【特記事項】

水産資源保護協会(1995)では「希少」とランクされ、本種の分布域全体での絶滅の危惧が指摘されている。岐阜県(2001)では絶滅危惧Ⅱ類にランクされている。

【引用文献】

- 愛知県科学教育センター, 1967. 愛知の動物. 222pp.
岐阜県, 2001. 岐阜県の絶滅のおそれのある野生動物. 350pp.
木村昭一, 1994. 東海地方の淡水貝類相. 研究彙報(第33報): 14-34. 全国高等学校水産教育研究会.
木村昭一・中西尚史, 1997. 東海地方に分布するオトコタデボシ属の1種. ちりぼたん, 27(2): 41-48. 日本貝類学会.
水産資源保護協会, 1995. 軟体動物. 日本の希少な野生水産物に関する基礎資料(Ⅱ), 131pp.

タケノコカワニナ *Stenomelania rufescens* (Martens)

【選定理由】

本種は河口部上部の汽水域の泥底に生息し、西南日本各地に生息記録があるが、現存する産地は著しく減少した。和田ほか(1996)では矢作川河口域の生息記録があげられているが、1997年以降の10回に及ぶ調査でも、汽水域の貝類としては大型である本種の死殻すら確認できなかった。愛知県科学教育センター(1967)で生息記録のある豊川河口域でも、死殻すら確認できなかった(松岡ほか,1999)。三河湾沿岸の河口域11カ所を詳しく調査した結果でも、死殻すら確認できなかった(木村・木村,1999)。従って、本県ではすでに絶滅したと思われる。和田ほか(1996)では、絶滅寸前とランクされている。

【形態】

殻高約7cmの塔型で殻はやや厚く、大型。成長にともなって殻頂部は欠落する。殻表はほとんど平滑で黒色。蓋は卵形で革質。

【分布の概要】

【県内の分布】

上述したように愛知県での生息場所は消失した。

【国内の分布】

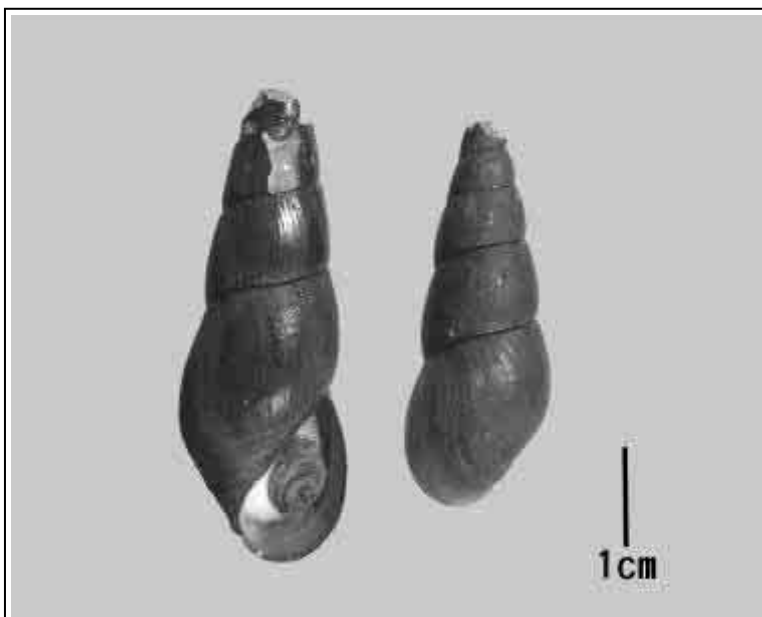
日本固有種。本州関東地方以南九州までに分布する。現在では三重県英虞湾が分布の北限の可能性が高い。

【生息地の環境／生態的特性】

【選定理由】の項参照。

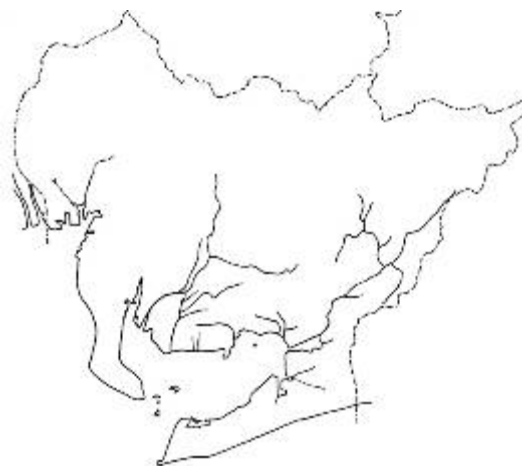
【現在の生息状況／減少の要因】

上述したような生息環境が護岸工事などで破壊された。生息場所が残された場所でも生息が確認されなくなってしまった要因については不明。



三重県志摩市英虞湾河口域, 2001年7月4日, 木村昭一 採集

県内分布図



【引用文献】

- 愛知県科学教育センター, 1967. 愛知の動物. 222pp.
木村昭一・木村妙子, 1999. 三河湾及び伊勢湾河口域におけるアシ原湿地の腹足類相. 日本ベントス学会誌 54: 44-56.
松岡敬二・木村妙子・木村昭一・三谷水産高等学校増殖部・山口啓子・高安克己, 1999. 豊川下流域の貝類相. 豊橋市自然史博物館研究報告, 9: 15-24
和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島哲・山西良平・西川輝昭・五島聖治・鈴木孝男・加藤真・島村賢正・福田宏, 1996. 日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状. WWF Japan Science Report 3, 182 pp.

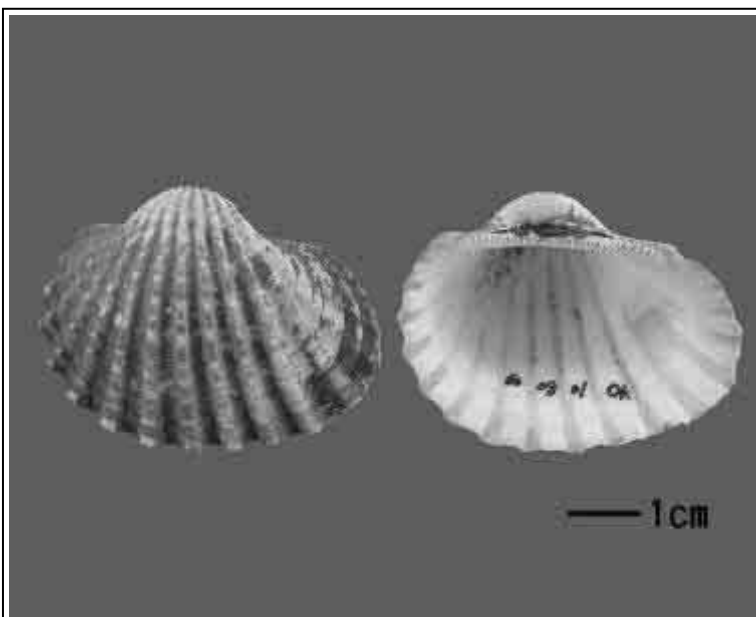
ハイガイ *Tegillarca granosa* (Linnaeus)

【選定理由】

本種は内湾奥の泥質干潟に生息する種で、かつて東京湾以南の閉鎖性の内湾に広く分布していたが、現在では瀬戸内海のごく一部と有明海でのみ生息が確認されている(和田ほか,1996)。本種は1960年代には衣浦湾(知多湾奥)、汐川干潟などの内湾奥で比較的普通に生息していた(愛知科学教育センター,1967)が、衣浦湾の生息地は埋め立てられ、近年では汐川干潟などで古い死殻が稀に採集される程度で、県内では絶滅した。和田ほか(1996)では絶滅寸前にランクされている。

【形態】

殻長 5cm、殻は厚く、よく膨らむ。殻表には結節を備えた強い肋が約 18 本ある。殻は白色であるが生時には灰褐色の殻皮で覆われる。



福岡県柳川市沖(有明海), 1986 年 8 月 1 日, 木村昭一 採集,

【分布の概要】

【県内の分布】

上述したように、県内では絶滅した。

【世界及び国内の分布】

日本、東南アジア、インド。かつて国内では東京湾以南から九州まで分布するとされていたが、現在では上述の通りの限られた水域にのみ分布する。

【生息地の環境 / 生態的特性】

【選定理由】の項参照。

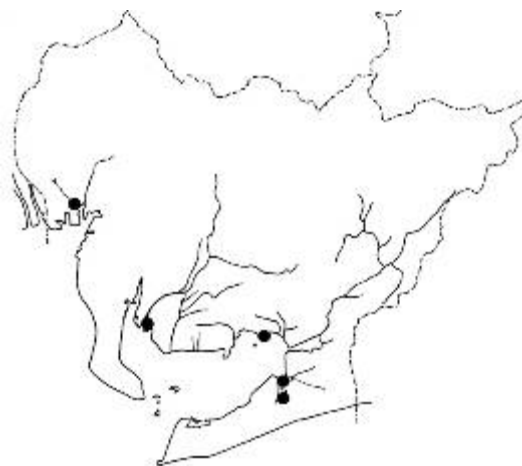
【現在の生息状況 / 減少の要因】

上述したような内湾奥の泥質干潟の環境は破壊されているので、本種の生息場所、生息数とも激減し、絶滅したと考えられる。

【特記事項】

水産庁・水産資源保護協会(1994)では希少にランクされている。

県内分布図



【引用文献】

水産庁・水産資源保護協会, 1994. 軟体動物. 日本の希少な野生水産生物に関する基礎資料(I), 123pp.

愛知県科学教育センター, 1967. 愛知の動物. 222pp.

和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島哲・山西良平・西川輝昭・五島聖治・鈴木孝男・加藤真・島村賢正・福田宏, 1996. 日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状. WWF Japan Science Report 3, 182 pp.

イチョウシラトリ *Tellina (Serratina) capsoides* Lamarck

【選定理由】

本種は内湾奥の泥質干潟に生息する種である。近年の詳細な調査の結果、かつて日本の広い範囲に分布していたが、現在では瀬戸内海周防灘及び沖縄本島でのみ生息が確認されている (Yamashita et al, 1997)。本種は 1960 年代には衣浦湾 (知多湾奥)、汐川干潟で少ないながらも生息が確認されていた (愛知科学教育センター, 1967) が、衣浦湾の生息地は埋め立てられ、近年では汐川干潟や藤前干潟 (河合秀高氏私信) で古い死殻が稀に採集される程度で、県内では絶滅した。和田ほか (1996) では絶滅寸前にランクされている。

【形態】

殻長 4cm、殻は丸みを帯びた三角形で膨らみが弱い。殻はやや厚く白色、規則的な板状の成長脈で覆われる。



三重県志摩市英虞湾河口域, 2003 年 6 月 14 日, 木村昭一 採集

【分布の概要】

【県内の分布】

上述したように、県内では絶滅した。

【世界及び国内の分布】

日本、東南アジア、インド洋。かつて国内では北海道以南から九州まで分布するとされていたが、現在では上述の通りの限られた水域にのみ分布する。現在では三重県英虞湾が分布の北限の可能性が高い。

【生息地の環境 / 生態的特性】

【選定理由】の項参照。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

上述したような内湾奥の泥質干潟の環境は破壊されているので、本種の生息場所、生息数とも激減し、絶滅したと考えられる。

【特記事項】

千葉県 (2001) では絶滅生物にランクされ、葉山しおさい博物館 (2001) では消滅にランクされている。

【引用文献】

愛知県科学教育センター, 1967. 愛知の動物. 222pp.

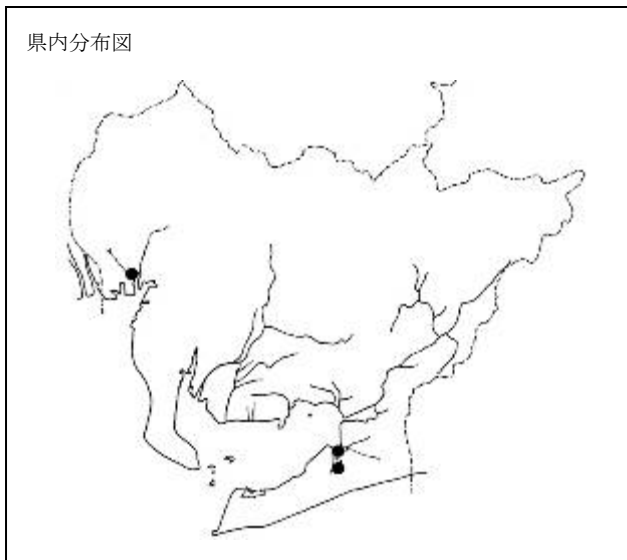
葉山しおさい博物館, 2001. 相模湾レッドデータ 貝類, 104pp.

千葉県, 2000. 千葉県の保護上重要な野生生物 千葉県レッドデータブック動物編. 438pp.

和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島哲・山西良平・西川輝昭・五島聖治・鈴木孝男・加藤真・島村賢正・福田宏, 1996. 日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状. WWF Japan Science Report 3, 182 pp.

Yamasita, Y., Okamoto, M., Harato, M., Fukuda, H., 1997. The present status and conservation values of endangered mollusks in tidal flats and estuaries of Japan-1. *Tellina (Serratina) capsoides* (Bivalvia: Veneroida: tellinidae). The Yuriyagai, Journal of the Malacozoological Association of Yamaguchi, 5(1/2):101-116.

県内分布図



アゲマキガイ *Sinonovacula constricta* (Lamarck)

【選定理由】

本種は内湾奥の泥質干潟に生息する種で、かつて三河湾以南の閉鎖性の内湾に広く分布していた。しかし、現在では瀬戸内海のごく一部と有明海でのみ生息が確認されている（和田ほか,1996）。有明海では食用種として多産していたが、近年資源量が減少している。本種は1960年代には衣浦湾（知多湾奥）、汐川干潟などの内湾奥で生息が確認されていた（愛知科学教育センター,1967）が、衣浦湾の生息地は埋め立てられ、汐川干潟では三河大橋の建設と前後して絶滅した（原田一夫氏私信）。近年では汐川干潟や藤前干潟（河合秀高氏私信）で古い死殻が稀に採集される程度で、県内では絶滅した。和田ほか（1996）では危険にランクされている。

【形態】

殻長10cm、殻は前後に長い長方形で、殻はやや薄い。殻の前後端は丸みがあり両殻の間は開口している。生時の殻表は殻頂部を除いて灰褐色の殻皮で覆われる。

【分布の概要】

【県内の分布】

上述したように、県内では絶滅した。

【世界及び国内の分布】

日本、朝鮮半島、中国。国内では、現在上述の通りの限られた水域にのみ分布する。

【生息地の環境／生態的特性】

【選定理由】の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したような潮間帯の環境は破壊されているので、本種の生息場所、生息数とも激減し、絶滅したと考えられる。

【特記事項】

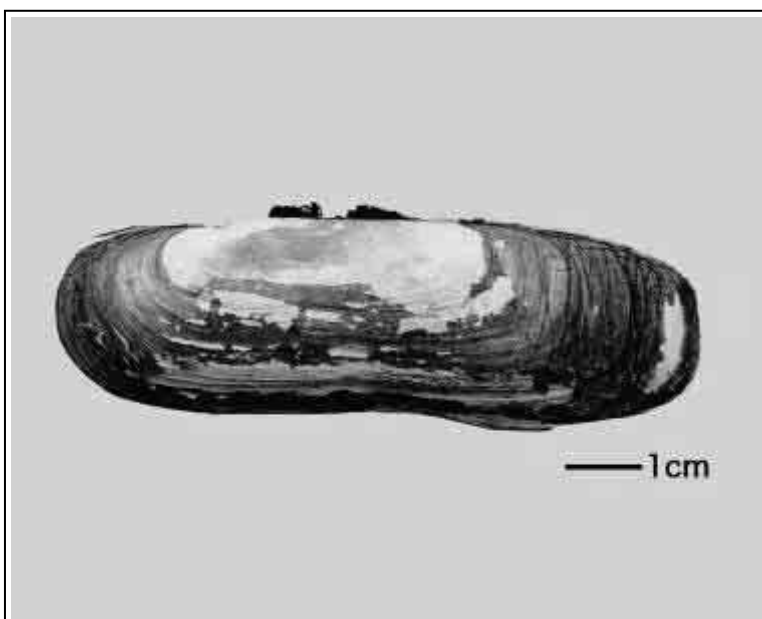
水産資源保護協会（1995）では危急にランクされている。

【引用文献】

愛知県科学教育センター, 1967. 愛知の動物. 222pp.

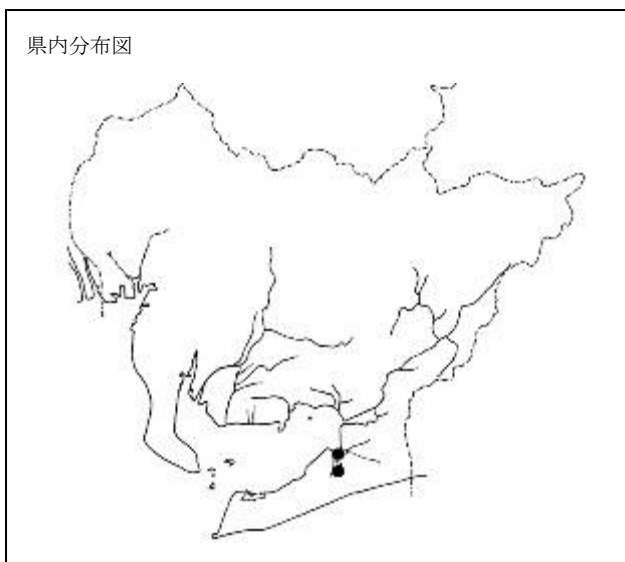
水産資源保護協会, 1995. 軟体動物. 日本の希少な野生水産物に関する基礎資料(II), 131pp.

和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島哲・山西良平・西川輝昭・五島聖治・鈴木孝男・加藤真・島村賢正・福田宏, 1996. 日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状. WWF Japan Science Report 3, 182 pp.



汐川干潟, 1960年4月, 原田一夫 採集

県内分布図



ハウライジギセル *Mesophaedusa ikenoi* Minato

【選定理由】

鳳来寺山を模式産地とする陸産貝類として著名な種。新居高校の池野国一氏によって愛知県鳳来寺山奥の院近くで発見され、続いて静岡県天竜市小松崎でも分布が確認された。また静岡県春野町石打松下、同町熊切でも生息するが何れも稀産で保全が望まれる。

【形態】

平均殻高 17.3mm、平均殻径 3.4mm、上腔壁は下腔壁より短い。両者の間にある腔壁についてはその数や形態に変異が多い。殻は棍棒で淡黄白色、表面に細かい成長脈があるが光沢はない。13～14 1/2 層を数える。



新城市(旧南設楽郡鳳来町)鳳来寺山, 1989年5月5日, 木村昭一 採集

【分布の概要】

【選定理由】の項でも述べたが、愛知県鳳来寺山の山頂近くと静岡県天竜市小松崎、春野町石打松下、同町熊切に局地的に分布する。

【生息地の環境 / 生態的特性】

急斜面の比較的乾いたガレ場の落葉堆積中や、大きな転石の側面などである。

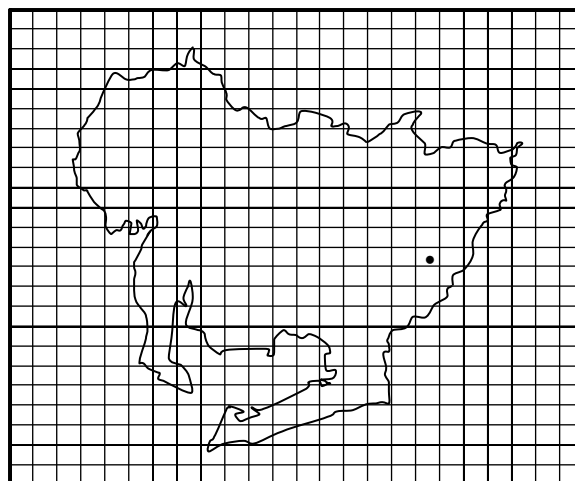
【現在の生息状況 / 減少の要因】

一時鳳来寺山では割に広範囲に生育し、当初考えた程稀産ではないと考えられたが、人為的圧力や乾燥と落葉堆積の減少から急速に減少し、今では絶滅寸前の稀産種となっている。

【保全上の留意点】

生息地の落葉の保護に留意する。

県内分布図



【特記事項】

環境省では絶滅危惧Ⅰ類にランクされている。

【関連文献】

- 湊 宏, 1980. 北海道奥尻島と本州中部産のキセルガイ科の2種類, VENUS 38 (4). 日本貝類学会.
- 湊 宏, 1985. 鳳来寺山とハウライジギセル. ちりぼたん, 6 (2). 日本貝類学会.
- 野々部良一・高桑 弘・原田一夫, 1984. 陸産貝類. 愛知の動物. 愛知県郷土資料刊行会.
- 増田 修・波部忠重, 1989. 静岡県陸淡水産貝類相. 東海大学自然史博物館
- 東 正雄, 1995. 原色日本陸産貝類図鑑増補改訂版. 保育社.

オモイガケナマイマイ *Aegista inexpectata* Kuroda et Minato

【選定理由】

豊橋市石巻山の石灰岩地を模式産地とする極めて特異な殻を有する陸産貝類である。

石巻山でも 8 合目以上の石灰岩が露出した部分に生息場所が限定される。生息範囲は著しく狭い。

奥多摩や天竜市等にも分布するが、いずれも絶滅に近い状態である。奥多摩産の個体は石巻山の個体と形態的に差異が認められる。

【形態】

殻高 3.5mm、殻径 10.7mm、5 1/2 層の薄く偏平～円盤状で淡い黄褐色～褐色の殻を持つ。体層周縁には著しく強い竜骨がある。臍孔は広く開き殻径の 1/3 に達する。



豊橋市石巻山, 2006 年 9 月 20 日, 木村昭一 採集

【分布の概要】

愛知県石巻山、静岡県天竜市、東京都奥多摩、埼玉県横瀬村、群馬県中里村の石灰岩地に分布する。

【生息地の環境 / 生態的特性】

石灰岩地の石灰岩の岩壁の割れ目の中に生息し、雨後などに這いだしてくる。

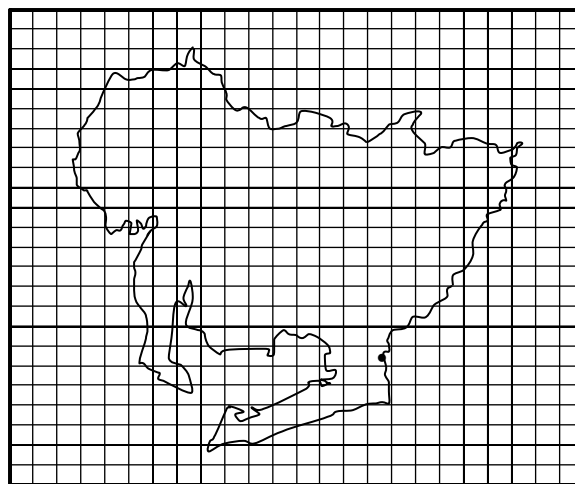
【現在の生息状況 / 減少の要因】

模式産地の石巻山では極めて稀産で、2、3 年に 1 度若干見つけられる程度で、他の産地では絶滅～準絶滅の状態である。特異な場所に生息し、極めて乾燥化し易い環境で、更にその形態の特異なことから人為的圧力を受け易い。

【保全上の留意点】

生息確認地の環境保全に留意するとともに、採取の防止に努める。

県内分布図



【特記事項】

環境省では絶滅危惧Ⅰ類にランクされている。

【関連文献】

- 柴田吉夫, 1995. 北設山岳県立公園一帯の自然科学. 北設山岳県立公園及びその付近の陸産貝類. 愛知県商工部通商観光課・北設山岳県立公園地区協議会・鳳来寺山県立公園地区協議会.
野々部良一・高桑 弘・原田一夫, 1984. 陸産貝類. 愛知の動物, p.35. 愛知県郷土資料刊行会.
湊 宏, 1988. 日本陸産貝類総目録. 日本陸産貝類総目録刊行会.
東 正雄, 1982. 原色日本陸産貝類図鑑, p.148. 保育社.

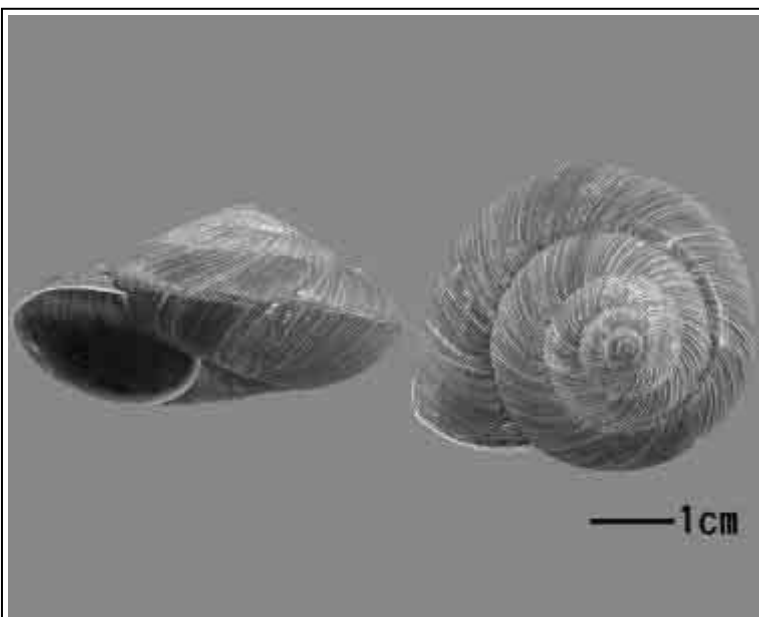
ミカワマイマイ *Euhadra scaevola mikawa* Amano

【選定理由】

石灰岩地帯の湿地の岩礫地に生息する。更に蛇紋岩地帯の沢部にも生息を伸ばしていたが、近年の乾燥化の進行に伴い、その生息は殆ど確認されていない。新城市（旧鳳来町）乗本の沢に死殻が認められるが、生貝は未だ発見されてない。模式産地の豊橋市嵩山町蛇穴付近も乾燥化が進み、ほとんど生貝が採集されていない。

【形態】

殻はやや大形で、殻高 20～20.5mm、殻径 38.5mm 内外、6 層。螺塔は偏平で低い円錐形。周縁角は著しく鋭い角ばりとなる。県内では珍しい左巻きのカタツムリである。



新城市吉祥山, 2007 年 12 月 27 日, 木村昭一 採集

【分布の概要】

静岡県二俣、三ヶ日付近や愛知県豊橋市嵩山、新城市（旧鳳来町）豊川東岸に分布する。2007 年に新城市吉祥山で生息が確認された。

【生息地の環境 / 生態的特性】

石灰岩地や蛇紋岩地帯の沢や崖のサワガニの生息する湿地帯の岩礫の間に生息する。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

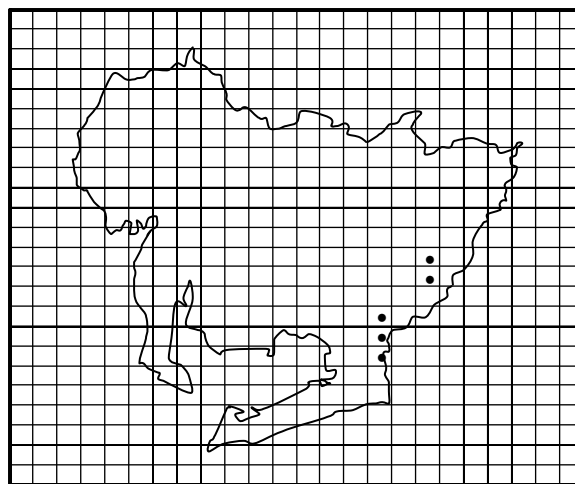
現在の生息地は静岡県側（三ヶ日、二俣）に僅かに生息が認められる。

生息地の乾燥化の進行が最大の要因で、人為的圧力も懸念される。

【保全上の留意点】

生息確認地を中心とした湿地帯の保全に留意する。また、採取の防止に努める。

県内分布図



【特記事項】

環境省では絶滅危惧Ⅱ類にランクされている。

【関連文献】

愛知県科学教育センター, 1967. 愛知の動物, p.151.

鳳来寺山自然科学博物館, 1973. 鳳来寺山 -自然と文化- 鳳来寺山の陸貝, p.85.

吉田博士祝賀記念誌論文篇, 1939. 三河石巻山嵩山(スセ)の陸貝相, pp.678-679.

野々部良一・高桑 弘・原田一夫, 1984. 陸産貝類. 愛知の動物, p.38. 愛知県郷土資料刊行会.

天野景従, 1966. 愛知県の陸貝相. 東海高校研究紀要 4:13.

東 正雄, 1982. 原色日本陸産貝類図鑑, p.180. 保育社.

柴田吉夫, 1995. 北設山岳県立公園一帯の自然科学. 北設山岳県立公園及びその付近の陸産貝類, p.82. 愛知県商工部通商観光課・北設山岳県立公園地区協議会・鳳来寺山県立公園地区協議会.

イシガイ *Unio douglasiae nipponensis* (Martens)

【選定理由】

本種の属するイシガイ科貝類は河川の下流域や平野部の用水路などの緩やかな流れで底質が砂泥底で水質の良い場所を生息場所としている。県内ではこのような場所はほとんど破壊されてしまったため、1960年代には広い分布を持ち多産したイシガイ科貝類全体の生息が危機的状況である。本種の県内における生息場所は木村（1994）を含めて現在12地点しかない。

【形態】

日本産イシガイ科貝類としては中型で通常、殻長7cm程度であるが、湖沼産の個体は大型になる傾向がある。殻長に比べて殻高が小さく輪郭は細長い方形。殻長部分には弱いさざ波状の彫刻がある。主歯は前側縁と平行で細長く、後側歯も長い。



幸田町相見川, 1989年12月3日, 木村昭一 採集

【分布の概要】

【県内の分布】

1960年代中頃までは木曽川水系の日光川、五条川、矢作川水系、豊川水系などで広く生息が確認されていたが（愛知県科学教育センター, 1967）、県内では河川下流域や平野部の小川や用水路の生息環境は壊滅的で木村（1994）では6カ所でのみ生息が確認されたが、生息数が少なかった2カ所では1998年から2001年の現地調査では再発見されていない。2005年木曽川本流の調査で生息地が追加されたが、生息数は非常に少ない（木村, 2006）。

【世界及び国内の分布】

日本固有亜種。北海道、本州、九州の河川下流域、湖沼に分布する。

【生息地の環境 / 生態的特性】

上述したように河川の下流域や平野部の用水路などの緩やかな流れで底質が砂泥底で水質の良い場所を生息場所としている。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

上述の通り生息地の破壊が極めて深刻で絶滅が危惧される。

【保全上の留意点】

水質の浄化、無秩序な護岸工事を避けることは当然であるが、イシガイ科貝類はグロキディウム幼生の時期にヨシノボリのような底生淡水魚類に寄生しなければ成長できない。従って他の淡水生物を含めた生息環境の保全が不可欠である。

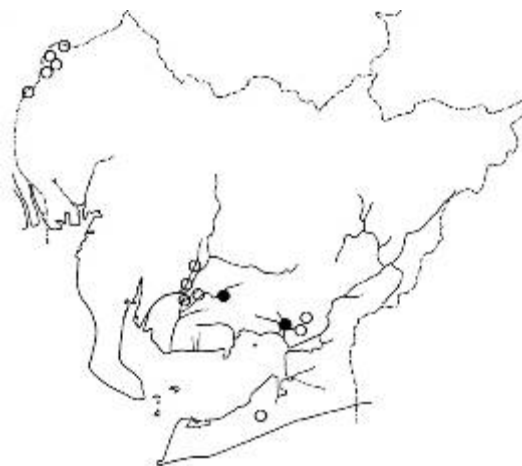
【特記事項】

岐阜県（2001）では絶滅危惧Ⅱ類にランクされている。

【引用文献】

- 愛知県科学教育センター, 1967. 愛知の動物. 222pp.
岐阜県, 2001. 岐阜県の絶滅のおそれのある野生動物. 350pp.
木村昭一, 1994. 東海地方の淡水貝類相. 研究彙報(第33報): 14-34. 全国高等学校水産教育研究会.
木村昭一, 2006. 愛知県におけるミズゴマツボの産出記録. かきつばた, 32: 22-25. 名古屋貝類談話会.

県内分布図



マツカサガイ *Inversidens japonensis* (Lea)

【選定理由】

本種の属するイシガイ科貝類は河川の下流域や平野部の用水路などの緩やかな流れで底質が砂泥底で水質の良い場所を生息場所としている。県内ではこのような場所はほとんど破壊されてしまったため、1960年代には広い分布を持ち多産したイシガイ科貝類全体（愛知県科学教育センター, 1967）の生息が危機的状況である。本種の県内における生息場所は木村（1994）を含めて現在5カ所しかない。

【形態】

日本産イシガイ科貝類としては通常小型な部類で、殻長5cm程度であるが、湖沼産の個体は大きくなり8cmを越す個体も採集される。オバエボシほどではないが殻長に比べて殻高が大きく輪郭は方形に近い。殻の後部には分岐した肋状の強い彫刻があり、前部にかけて弱くなり縮緬状から顆粒状の彫刻が覆う。この殻表の彫刻が「松毬」を連想させるこの和名がある。ただし殻表の彫刻の著しく弱い個体も見られる。主歯は三角形で強く、後側歯も強く長い。



安城市鹿乗川, 1993年6月12日, 木村昭一 採集

【分布の概要】

【県内の分布】

1960年代中頃までは木曽川水系の日光川、五条川、矢作川水系、豊川水系などで広く生息が確認されていたが（愛知県科学教育センター, 1967）、県内では河川下流域や平野部の小川や用水路の生息環境は壊滅的で木村（1994）では1カ所でのみ生息が確認され、その後の調査で2カ所の生息が確認された。ただしそのうちの2カ所では極めて生息数が少ない。豊川市白川でわずかに生息を確認したにすぎず（木村・浅香, 2004）、2005年木曽川本流の調査でも生息が確認できなかった（木村, 2006）。

【世界及び国内の分布】

日本固有種。北海道、本州、九州の河川下流域、湖沼に分布する。

【生息地の環境 / 生態的特性】

上述したように河川の下流域や平野部の用水路などの緩やかな流れで底質が砂泥底で水質の良い場所を生息場所としている。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

上述の通り生息地の破壊が極めて深刻で絶滅が危惧される。

【保全上の留意点】

水質の浄化、無秩序な護岸工事を避けることは当然であるが、イシガイ科貝類はグロキディウム幼生の時期にヨシノボリのような底生淡水魚類に寄生しなければ成長できない。従って他の淡水生物を含めた生息環境の保全が不可欠である。

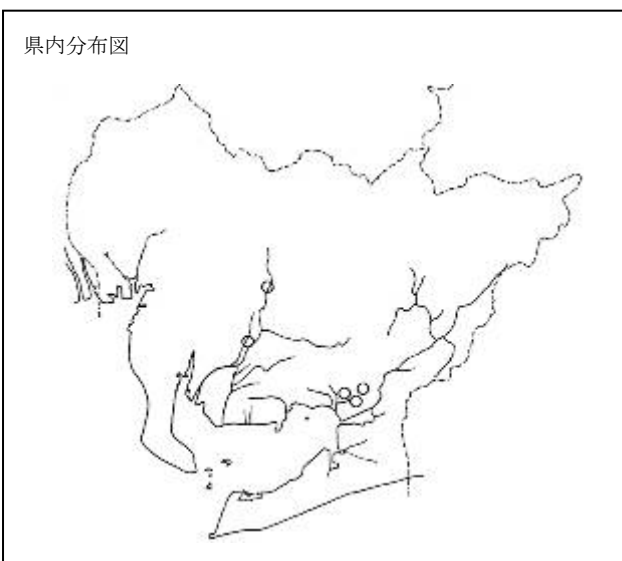
【特記事項】

水産資源保護協会（1995）では「減少」とランクされ、本種の分布域全体での絶滅の危惧が指摘されている。千葉県（2000）では重要保護生物にランクされている。岐阜県（2001）では絶滅危惧Ⅱ類にランクされている。

【引用文献】

- 愛知県科学教育センター, 1967. 愛知の動物. 222pp.
岐阜県, 2001. 岐阜県の絶滅のおそれのある野生動物. 350pp.
木村昭一, 1994. 東海地方の淡水貝類相. 研究彙報(第33報): 14-34. 全国高等学校水産教育研究会.
木村昭一・浅香智也, 2004. 豊川市白川の淡水二枚貝類相. かきつばた, 29: 21-24. 名古屋貝類談話会.
木村昭一, 2006. 愛知県におけるミズゴマツボの産出記録. かきつばた, 32: 22-25. 名古屋貝類談話会.
水産資源保護協会, 1995. 軟体動物. 日本の希少な野生水産物に関する基礎資料(Ⅱ), 131pp.
千葉県, 2000. 千葉県の保護上重要な野生生物 千葉県レッドデータブック動物編. 438pp.

県内分布図



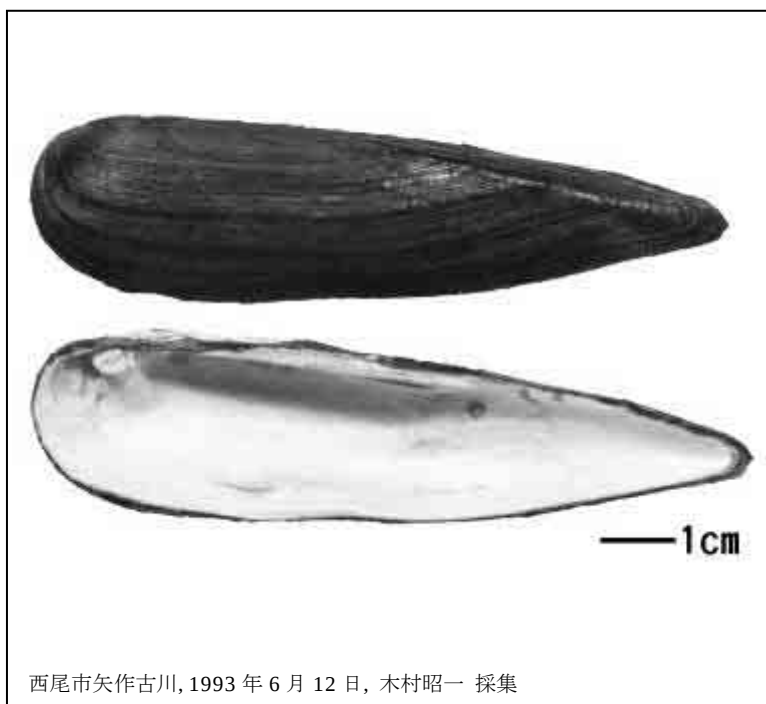
トンガリササノハガイ *Lanceolaria grayana cuspidata* Kira

【選定理由】

本種の属するイシガイ科貝類は河川の下流域や平野部の用水路などの緩やかな流れで底質が砂泥底で水質の良い場所を生息場所としている。県内ではこのような場所はほとんど破壊されてしまったため、1960年代には広い分布を持ち多産したイシガイ科貝類全体（愛知県科学教育センター, 1967）の生息が危機的状況である。本種の県内における生息場所は木村（1994）を含めて現在9地点しかない。

【形態】

日本産イシガイ科貝類としては中型で細長い、殻長10cm程度であるが、止水産の個体は大型になる傾向がある。後端が鋭くとがり殻長に比べて殻高が非常に小さく輪郭は細長い笹の葉状。和名もこの形に由来する。



西尾市矢作古川, 1993年6月12日, 木村昭一 採集

【分布の概要】

【県内の分布】

1960年代中頃までは木曽川水系の日光川、五条川、矢作川水系、豊川水系などで広く生息が確認されていたが（愛知県科学教育センター, 1967）、県内では河川下流域や平野部の小川や用水路の生息環境は壊滅的で木村（1994）では5カ所でのみ生息が確認されたが、1カ所では1998年から2001年の現地調査では再発見されていない。それ以外に、豊橋市に生息地が1地点ある（松岡・伊澤, 1993）。2005年木曽川本流の調査で生息地が追加されたが、生息数は非常に少ない（木村, 2006）。

【世界及び国内の分布】

日本固有種。愛知県以西の本州、九州の河川下流域、湖沼に分布する。

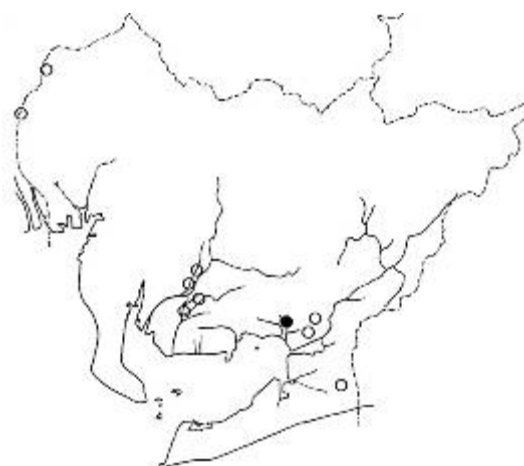
【生息地の環境 / 生態的特性】

上述したように河川の下流域や平野部の用水路などの緩やかな流れで底質が砂泥底で水質の良い場所を生息場所としている。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

上述の通り生息地の破壊が極めて深刻で絶滅が危惧される。

県内分布図



【保全上の留意点】

水質の浄化、無秩序な護岸工事を避けることは当然であるが、イシガイ科貝類はグロキディウム幼生の時期にヨシノボリのような底生淡水魚類に寄生しなければ成長できない。従って他の淡水生物を含めた生息環境の保全が不可欠である。

【特記事項】

現在豊橋市の生息地は本種の分布東限である。

岐阜県(2001)では絶滅危惧Ⅱ類にランクされている。

【引用文献】

愛知県科学教育センター, 1967. 愛知の動物. 222pp.

岐阜県, 2001. 岐阜県の絶滅のおそれのある野生動物. 350pp.

木村昭一, 1994. 東海地方の淡水貝類相. 研究彙報(第33報):14-34. 全国高等学校水産教育研究会.

木村昭一, 2006. 愛知県におけるミズゴマツボの産出記録. かきつばた, 32: 22-25. 名古屋貝類談話会.

松岡敬二・伊澤伸恵, 1993. 豊橋市荒神池のトンガリササノハガイ, 豊橋市自然史博物館研究報告第3号: 37-39.

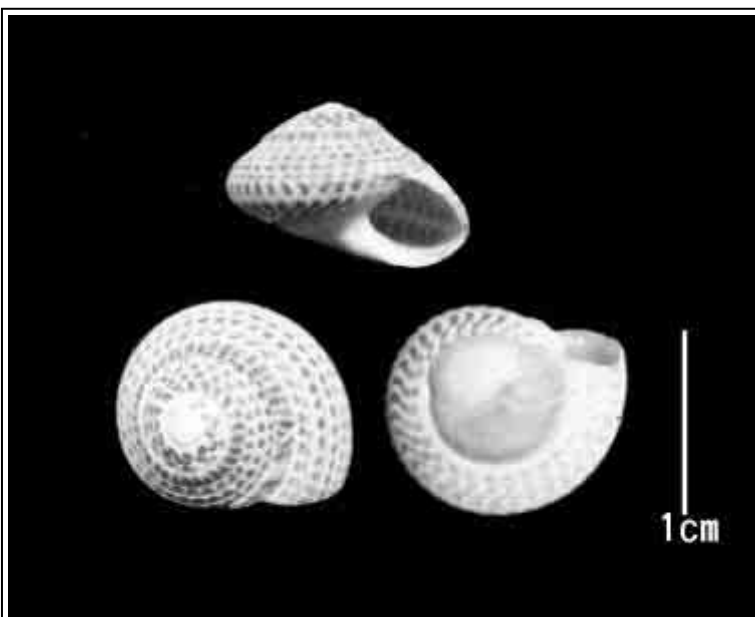
イボキサゴ *Umbonium (Suchium) moniliferum* (Lamarck)

【選定理由】

本種は内湾奥の砂泥干潟にかつてはごく普通に多産した種で、伊勢湾、三河湾でも1960年代には広い範囲で多産した（愛知県科学教育センター,1967）。本県でも干潟という生息環境自体が護岸工事や埋め立てで著しく減少しているので、本種の生息地、生息数とも著しく減少したと考えられる。また汐川干潟のように広大な干潟が残っている場所でも、生貝が見られなくなっている（藤岡・木村,2000）。近年10年間あまりの調査でも生貝を確認していないし、古い死殻しか得られない場所も多い。和田ほか（1996）では、危険とランクされている。

【形態】

殻径約1.5cmの低いそろばん玉型で、殻は厚く周辺は丸い。外洋の砂浜に生息するキサゴと酷似するが殻が小さく、臍部の滑層が大きい点で区別できる。



南知多町内海, 2001年9月16日, 木村昭一 採集(打上げ死殻)

【分布の概要】

【県内の分布】

上述したように県内では近年生貝を全く採集できない。

【世界及び国内の分布】

日本固有種。日本では本州東北地方から九州まで分布する。

【生息地の環境 / 生態的特性】

【選定理由】の項参照。

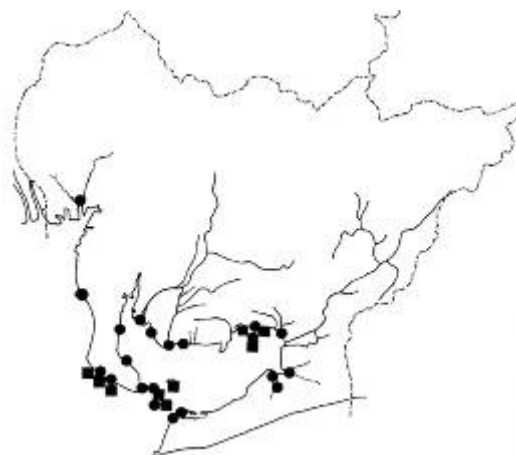
【現在の生息状況 / 減少の要因】

上述したように県内では近年生貝を採集できない。新しい死殻さえ多くないので、危機的な生息状況といえる。

【保全上の留意点】

内湾の潮間帯の環境を保全する。干潟の保全や、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

県内分布図



【特記事項】

千葉県（2001）では重要保護動物にランクされ、葉山しおさい博物館（2001）では消滅にランクされている。

【引用文献】

愛知県科学教育センター, 1967. 愛知の動物. 222pp.

藤岡えり子・木村妙子, 2000. 三河湾奥部汐川干潟の1998年春期における底生動物相. 豊橋市自然史博物館研究報告, 10: 31-39.

葉山しおさい博物館, 2001. 相模湾レッドデータ 貝類, 104pp.

千葉県, 2000. 千葉県の保護上重要な野生生物 千葉県レッドデータブック動物編. 438pp.

和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島哲・山西良平・西川輝昭・五島聖治・鈴木孝男・加藤真・島村賢正・福田宏, 1996. 日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状. WWF Japan Science Report 3, 182 pp.

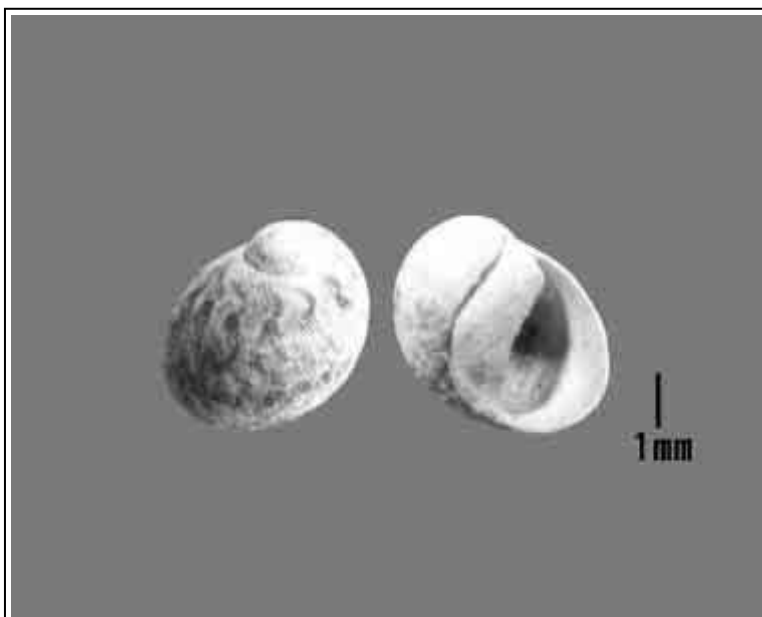
ウミヒメカノコ *Smaragdia* sp.

【選定理由】

本種は内湾の干潟から潮下帯のアマモ場に生息する。静岡県浜名湖など日本本土の内湾域から死殻が時折採集されているが、近年生貝の産出を確認したという確実な情報はない（和田ほか,1996）。本県でも正式な生息記録がなく、伊勢湾湾口部の小規模なアマモ場（潮下帯）より死殻が数個体採集されたにすぎない。無論近年の生息記録はない。和田ほか（1996）では、現状不明とされている。

【形態】

殻長約 5mm の球型で、螺塔は低い。殻表は平滑で光沢があり、灰色の地色に稲妻状の細かい縦縞がある。蓋は石灰質。キンランカノコガイ *Smaragdia paulucciana* Gassies と混同されており学名は確定していないが明らかに別種である。キンランカノコガイとは螺塔が低く、レモン色の螺状色帯が無いことなどから区別される。



南知多町日間賀島南沖水深 3m アマモ場(ドレッジ), 1994 年 10 月 13 日, 木村昭一 採集(死殻)

【分布の概要】

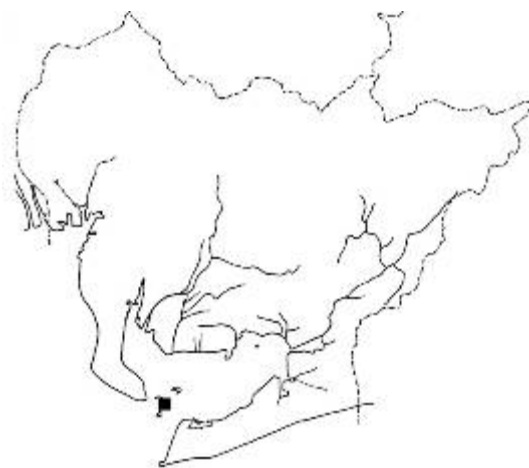
【県内の分布】

上述したように県内で正式産出記録はなく、現在生息が確認されている場所もない。

【世界及び国内の分布】

日本でのみ分布が確認されている。国内では房総半島以南に生息するとされているが詳細は不明。

県内分布図



【生息地の環境 / 生態的特性】

【選定理由】の項参照。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

アマモ場やコアジモ帯に生息する（波部,1961）。アマモ場の減少が本種の減少の要因の一つであると思われる。

【保全上の留意点】

アマモ場を含めた内湾干潟から潮下帯の生息環境を保全する。干潟を保全し、水質の富栄養化を防止することが必要である。

【引用文献】

波部忠重, 1961. 続原色日本貝類図鑑. 保育社, 182pp.

和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島哲・山西良平・西川輝昭・五島聖治・鈴木孝男・加藤真・島村賢正・福田宏, 1996. 日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状. WWF Japan Science Report 3, 182 pp.

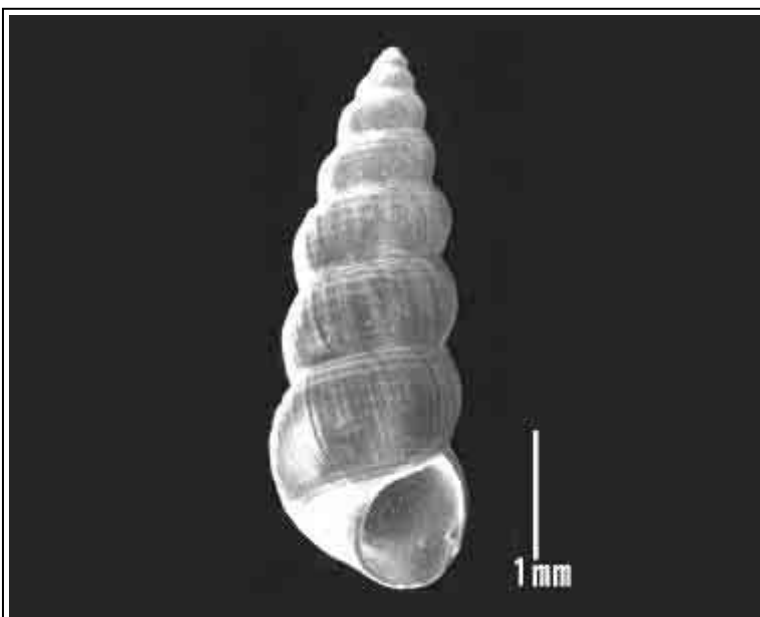
サナギモツボ *Eufenella pupoides* (A.Adams)

【選定理由】

本種は内湾の潮下帯砂泥地にすむ。内湾域の潮下帯の環境は上部の干潟の破壊や浚渫、貧酸素水塊の発生、水質汚濁などで急速に悪化していて、この生息帯に棲む貝類相が著しく単純化している。本種も近年の調査の結果アマモ場周辺で、死殻は少ないながらも採集されたが、生貝は採集できなかった(木村,1996)。和田ほか(1996)では、希少とランクされている。

【形態】

殻高約 4mm の微小で、細長い紡錘形の殻を持つ。螺層はよく膨らみ、縫合は深い。



南知多町日間賀島南沖水深 5-6m(ドレッジ), 1994 年 10 月 11 日,
木村昭一 採集(死殻)

【分布の概要】

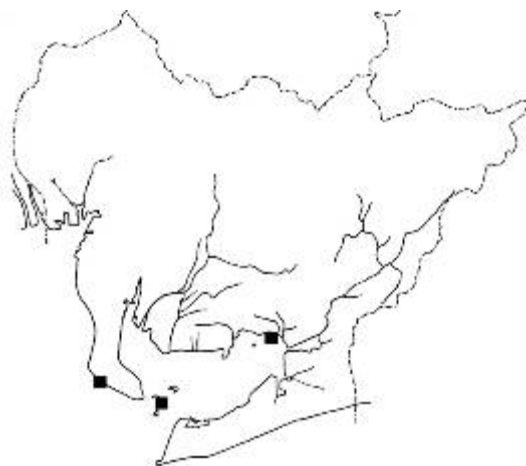
【県内の分布】

上述したように県内では近年生貝が採集されていない。

【世界及び国内の分布】

日本、インド、西太平洋。国内では本州東北地方から九州まで分布する。

県内分布図



【生息地の環境 / 生態的特性】

【選定理由】の項参照。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

上述したように県内では生貝を採集できない。死殻さえ多くないので、危機的な生息状況といえる。

【保全上の留意点】

内湾の潮下帯の環境を保全する。干潟の保全や、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

【引用文献】

木村昭一, 1996. ドレッジによって採集された日間賀島南部海域の底生動物. 研究彙報(第 35 報): 3-19. 全国高等学校水産教育研究会.

和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島哲・山西良平・西川輝昭・五島聖治・鈴木孝男・加藤真・島村賢正・福田宏, 1996. 日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状. WWF Japan Science Report 3, 182 pp.

スジウネリチョウジガイ *Rissoina (Rissoina) constulata* Dunker

【選定理由】

本種は内湾の潮下帯砂泥地にすむ。内湾域の潮下帯の環境は上部の干潟の破壊や浚渫、貧酸素水塊の発生、水質汚濁などで急速に悪化していて、この生息帯に棲む貝類相が著しく単純化している。本種も日間賀島の潮間帯や同島南沖水深2から10mの砂泥底より、死殻は少ないながらも採集されたが、生貝は採集できなかった(木村,1995,1996)。和田ほか(1996)では、希少(日本本土)とランクされている。

【形態】

殻高約5mmの微小で、やや細い塔型の殻を持つ。殻表の縦肋は緩曲する。



南知多町日間賀島南沖水深5-6m(ドレッジ), 1994年10月11日,
木村昭一 採集(死殻)

【分布の概要】

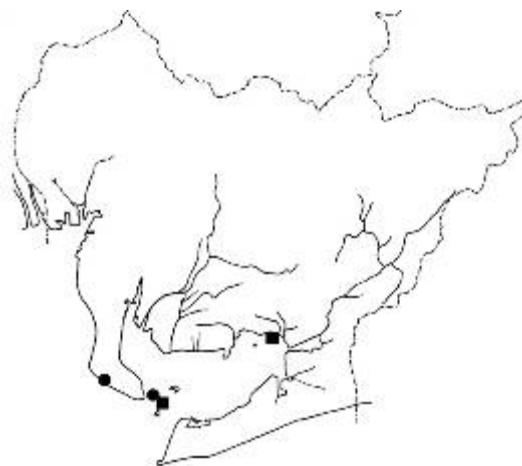
【県内の分布】

上述したように県内では近年生貝が採集されていない。

【世界及び国内の分布】

日本でのみ採集されている。房総半島以南から琉球列島、小笠原諸島まで分布する。

県内分布図



【生息地の環境 / 生態的特性】

【選定理由】の項参照。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

上述したように県内では生貝を採集できない。死殻さえ多くないので、危機的な生息状況といえる。

【保全上の留意点】

内湾の潮下帯の環境を保全する。干潟の保全や、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

【引用文献】

- 木村昭一, 1995. 日間賀島南部海岸の潮間帯付近の軟体動物相. 研究彙報(第34報): 16-27. 全国高等学校水産教育研究会.
木村昭一, 1996. ドレッジによって採集された日間賀島南部海域の底生動物. 研究彙報(第35報): 3-19. 全国高等学校水産教育研究会.
和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島哲・山西良平・西川輝昭・五島聖治・鈴木孝男・加藤真・島村賢正・福田宏, 1996. 日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状. WWF Japan Science Report 3, 182 pp.

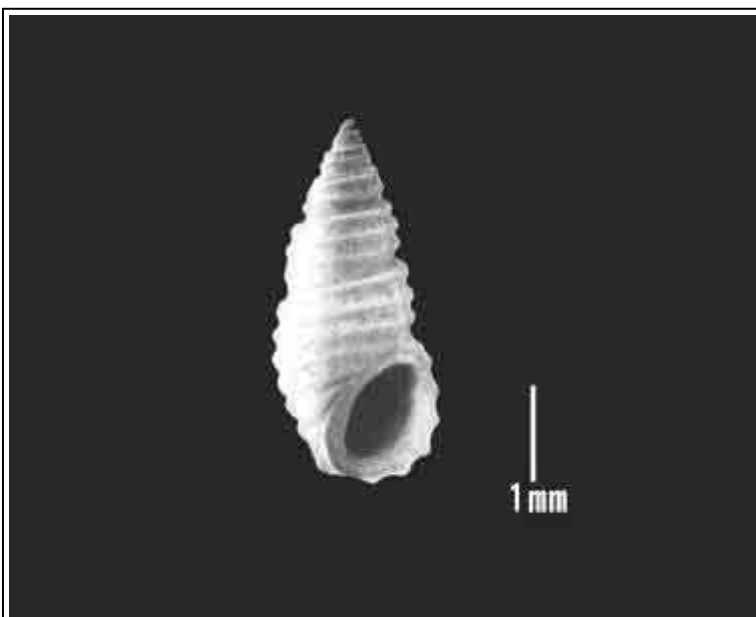
ゴマツボ *Stosicia annulata* (Dunker)

【選定理由】

本種は内湾の潮下帯砂泥地にすむ。内湾域の潮下帯の環境は上部の干潟の破壊や浚渫、無酸素水塊の発生、水質汚濁などで急速に悪化していて、この生息帯に棲む貝類相が著しく単純化している。本種も日間賀島の潮間帯や同島南沖水深2から10mの砂泥底より、死殻は普通に採集されたが、生貝は採集できていない（木村,1995,1996）。和田ほか（1996）では、危険とランクされている。

【形態】

殻高約5mmの微小で、やや細い紡錘形で殻は厚い。殻表に強い螺肋がありその間は溝状になる。



南知多町日間賀島南沖水深5-6m(ドレッジ), 1994年10月27日, 木村昭一 採集(死殻)

【分布の概要】

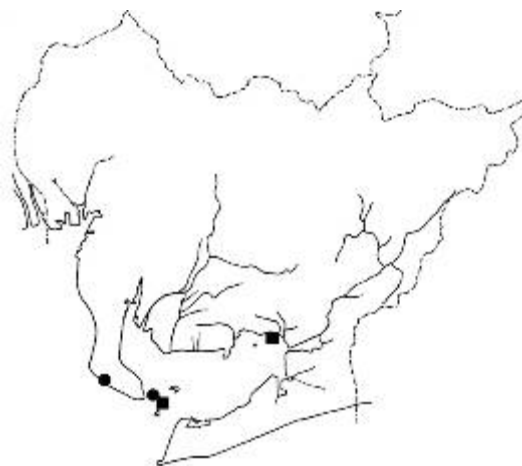
【県内の分布】

上述したように県内では近年生貝が採集されていない。

【世界及び国内の分布】

日本と中国沿岸。国内では房総半島以南から九州まで分布する。

県内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

【選定理由】の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したように県内では生貝が全く採集できない。危機的な生息状況といえる。

【保全上の留意点】

内湾の潮下帯の環境を保全する。干潟の保全や、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

【引用文献】

- 木村昭一, 1995. 日間賀島南部海岸の潮間帯付近の軟体動物相. 研究彙報(第34報): 16-27. 全国高等学校水産教育研究会.
 木村昭一, 1996. ドレッジによって採集された日間賀島南部海域の底生動物. 研究彙報(第35報): 3-19. 全国高等学校水産教育研究会.
 和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島哲・山西良平・西川輝昭・五島聖治・鈴木孝男・加藤真・島村賢正・福田宏, 1996. 日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状. WWF Japan Science Report 3, 182 pp.

アラウズマキ *Pygmaeorata duplicata* (Lischke)

【選定理由】

本種は内湾の潮下帯砂泥地にすむ。内湾域の潮下帯の環境は上部の干潟の破壊や浚渫、貧酸素水塊の発生、水質汚濁などで急速に悪化していて、この生息帯に棲む貝類相が著しく単純化している。本種も日間賀島の潮間帯の転石下や同島南沖水深 2 から 10m の砂泥底より、死殻は比較的多く採集されたが生貝は採集できなかった(木村、1995、1996)。和田ほか(1996)では、希少とランクされている。

【形態】

殻径約 5mm の微小な円盤形で殻は厚い。殻周辺に太い螺肋が角張る。臍孔は広い。



南知多町日間賀島南沖水深 5-6m(ドレッジ), 1994 年 11 月 21 日,
木村昭一 採集(死殻)

【分布の概要】

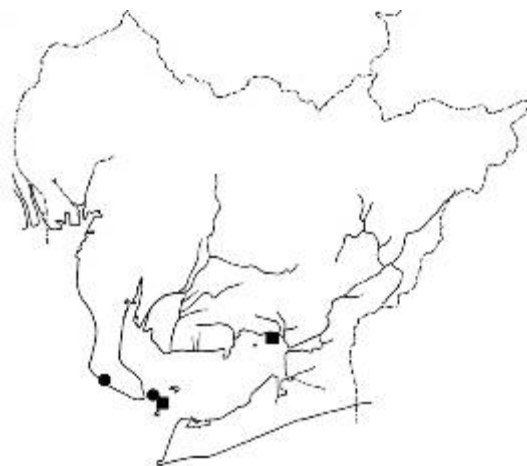
【県内の分布】

上述したように県内では近年生貝が採集されていない。

【世界及び国内の分布】

日本でのみ採集されている。房総半島以南から九州まで分布する。

県内分布図



【生息地の環境 / 生態的特性】

【選定理由】の項参照。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

上述したように県内では、死殻は比較的多いが生貝を採集できない。危機的な生息状況といえる。

【保全上の留意点】

内湾の潮下帯の環境を保全する。干潟の保全や、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

【引用文献】

- 木村昭一, 1995. 日間賀島南部海岸の潮間帯付近の軟体動物相. 研究彙報(第 34 報): 16-27. 全国高等学校水産教育研究会.
木村昭一, 1996. ドレッジによって採集された日間賀島南部海域の底生動物. 研究彙報(第 35 報): 3-19. 全国高等学校水産教育研究会.
和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島哲・山西良平・西川輝昭・五島聖治・鈴木孝男・加藤真・島村賢正・福田宏, 1996. 日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状. WWF Japan Science Report 3, 182 pp.

イソマイマイ *Tornus planus* (A.Adams)

【選定理由】

本種は内湾の潮下帯砂泥地にすむ。内湾域の潮下帯の環境は上部の干潟の破壊や浚渫、貧酸素水塊の発生、水質汚濁などで急速に悪化していて、この生息帯に棲む貝類相が著しく単純化している。本種も日間賀島南沖水深2から10mの砂泥底より、死殻をわずかに採集したが、生貝は採集できていない（木村,1996）。和田ほか（1996）では、希少とランクされている。

【形態】

殻径約10mmの円盤形で殻は薄く壊れやすい。殻表には細かい螺肋が多数密に並ぶ。臍孔は広い。



南知多町日間賀島南沖水深3m(ドレッジ), 1994年12月12日, 木村昭一 採集(死殻)

【分布の概要】

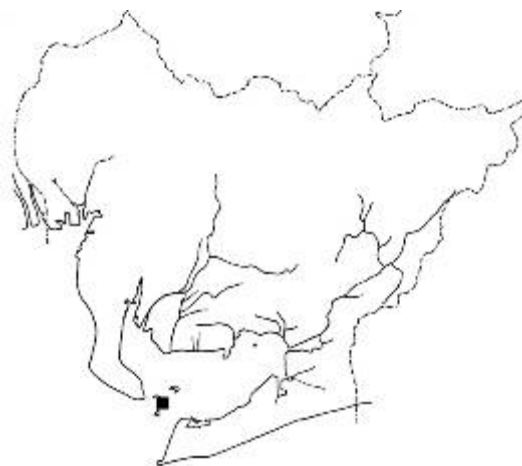
【県内の分布】

上述したように県内では近年生貝が採集されていない。死殻も稀産である。

【世界及び国内の分布】

日本、インド、西太平洋。国内では房総半島以南に分布する。

県内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

【選定理由】の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したように県内では、生貝を採集できていない。死殻でさえ稀である。危機的な生息状況といえる。

【保全上の留意点】

内湾の潮下帯の環境を保全する。干潟の保全や、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

【引用文献】

木村昭一, 1996. ドレッジによって採集された日間賀島南部海域の底生動物. 研究彙報(第35報): 3-19. 全国高等学校水産教育研究会.

和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島哲・山西良平・西川輝昭・五島聖治・鈴木孝男・加藤真・島村賢正・福田宏, 1996. 日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状. WWF Japan Science Report 3, 182 pp.

シラギク *Pseudoliotia pulchella* (Dunker)

【選定理由】

本種は内湾の潮下帯砂泥地にすむ。内湾域の潮下帯の環境は上部の干潟の破壊や浚渫、貧酸素水塊の発生、水質汚濁などで急速に悪化していて、この生息帯に棲む貝類相が著しく単純化している。本種も日間賀島の潮間帯の転石下や同島南沖水深 2 から 10m の砂泥底より、死殻は比較的多く採集されたが生貝は採集できなかった（木村、1995、1996）。和田ほか（1996）では、危険とランクされている。



南知多町日間賀島南沖水深 5-6m(ドレッジ), 1994 年 11 月 21 日, 木村昭一 採集(死殻)

【形態】

殻径約 3mm の微小な円盤形で殻は厚い。殻表には太い螺肋と縦肋が交差して、格子状になる。臍孔は広い。

【分布の概要】

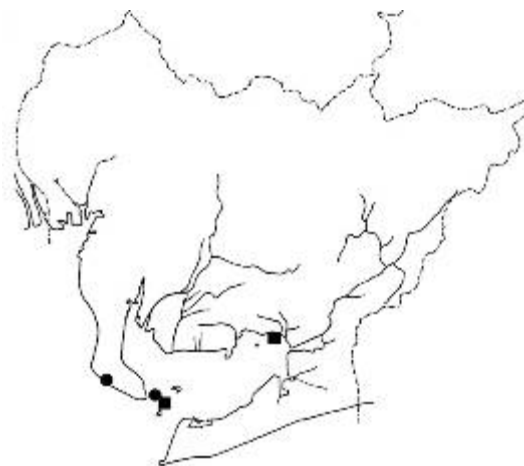
【県内の分布】

上述したように県内では近年生貝が採集されていない。

【世界及び国内の分布】

日本固有種。房総半島以南から九州まで分布する。

県内分布図



【生息地の環境 / 生態的特性】

【選定理由】の項参照。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

上述したように県内では、死殻は比較的多いが生貝は採集できない。危機的な生息状況といえる。

【保全上の留意点】

内湾の潮下帯の環境を保全する。干潟の保全や、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

【引用文献】

- 木村昭一, 1995. 日間賀島南部海岸の潮間帯付近の軟体動物相. 研究彙報(第 34 報): 16-27. 全国高等学校水産教育研究会.
木村昭一, 1996. ドレッジによって採集された日間賀島南部海域の底生動物. 研究彙報(第 35 報): 3-19. 全国高等学校水産教育研究会.
和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島哲・山西良平・西川輝昭・五島聖治・鈴木孝男・加藤真・島村賢正・福田宏, 1996. 日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状. WWF Japan Science Report 3, 182 pp.

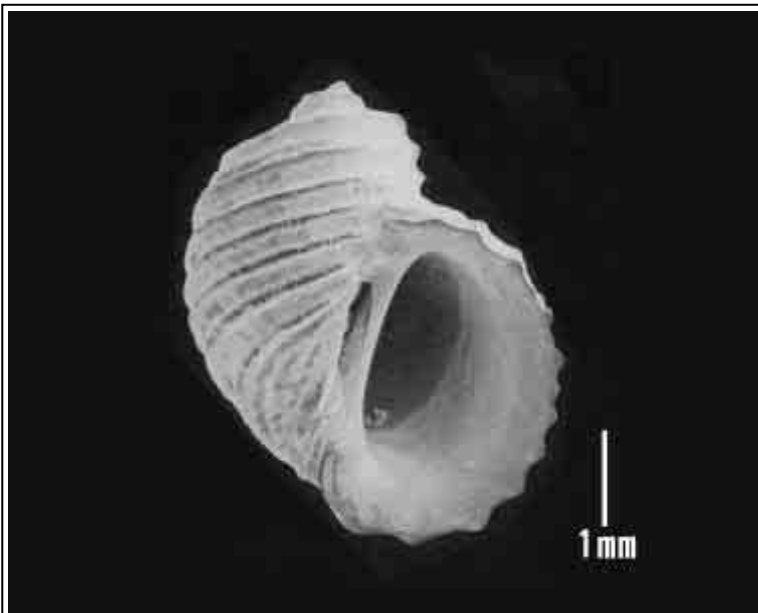
ハツカネズミ *Fossarus tornatilis* (Gould)

【選定理由】

本種は内湾の潮下帯砂泥地にすむ。内湾域の潮下帯の環境は上部の干潟の破壊や浚渫、貧酸素水塊の発生、水質汚濁などで急速に悪化していて、この生息帯に棲む貝類相が著しく単純化している。本種も日間賀島南沖水深2から10mの砂泥底より、死殻は少ないながらも採集されたが、生貝は採集できなかった（木村,1996）。和田ほか（1996）では、希少とランクされている。

【形態】

殻高約4mmの微小で、太い紡錘形の殻を持つ。体層は大きく7～8本の太い螺肋がある。殻口は半円形。



南知多町日間賀島南沖水深5-6m(ドレッジ), 1994年10月11日, 木村昭一 採集(死殻)

【分布の概要】

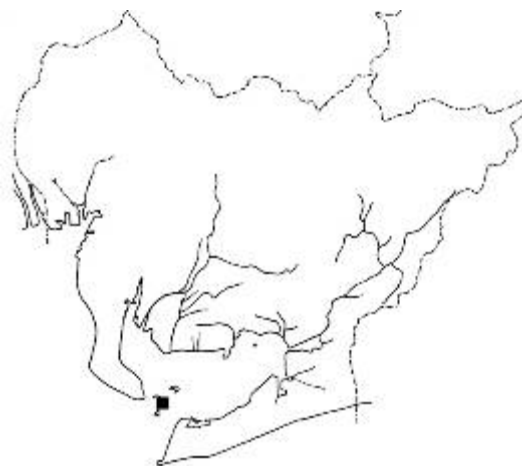
【県内の分布】

上述したように県内では近年生貝が採集されていない。

【世界及び国内の分布】

日本、中国大陸。国内では房総半島以南から九州まで分布する。

県内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

【選定理由】の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したように県内では生貝を採集できない。死殻さえ多くないので、危機的な生息状況といえる。

【保全上の留意点】

内湾の潮下帯の環境を保全する。干潟の保全や、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

【引用文献】

木村昭一, 1996. ドレッジによって採集された日間賀島南部海域の底生動物. 研究彙報(第35報): 3-19. 全国高等学校水産教育研究会.

和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島哲・山西良平・西川輝昭・五島聖治・鈴木孝男・加藤真・島村賢正・福田宏, 1996. 日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状. WWF Japan Science Report 3, 182 pp.

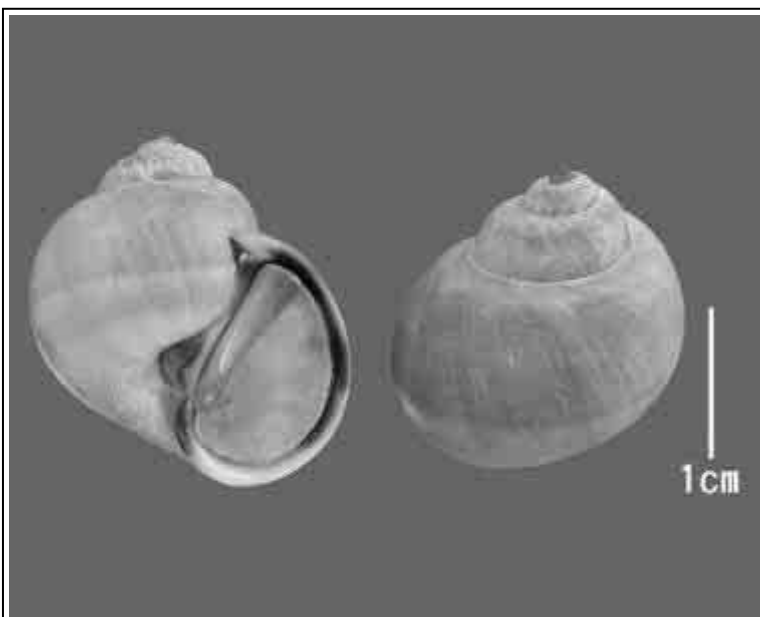
アダムスタマガイ *Cryptopnatica adamsiana* (Dunker)

【選定理由】

本種は内湾の泥質干潟から潮下帯にすむ。本県では干潟と共に内湾域の潮下帯の環境は上部の干潟の破壊や浚渫、貧酸素水塊の発生、水質汚濁などで急速に悪化していて、この生息帯に棲む貝類相が著しく単純化している。本種は1960年代には三河湾奥部の干潟周辺に普通に見られたようで（愛知県科学教育センター, 1967）、現在でも比較的多くの死殻は採集されているが（中山, 1980：木村, 1999）、生貝は蒲郡市沖で小型の個体が数個体採取されたにすぎない（木村, 未発表）。和田ほか（1996）では、危険とランクされている。

【形態】

殻径約2cmの球形で殻はやや厚い。蓋は石灰質で白色、蓋の溝は浅く狭い。



蒲郡市沖水深2m アマモ場(ドレッジ), 2001年12月12日, 木村昭一 採集

【分布の概要】

【県内の分布】

上述したように県内では近年ほとんど生貝が採集されていない。

【世界及び国内の分布】

日本固有種。房総半島以南から九州まで分布する。

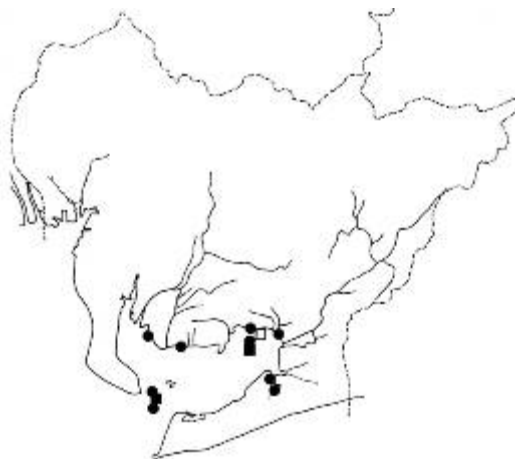
【生息地の環境 / 生態的特性】

【選定理由】の項参照。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

上述したように現在でも三河湾奥で比較的新鮮な死殻は採集できる。ただし、この死殻については有明海から運ばれたアサリに混っていた個体が採集されている可能性がある。いずれにしても、県内では近年生貝がほとんど採集されていないので、危機的な生息状況といえる。

県内分布図



【保全上の留意点】

内湾の潮間帯の環境を保全する。干潟の保全や、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

【特記事項】

葉山しおさい博物館（2001）では消滅寸前にランクされている。

【引用文献】

- 葉山しおさい博物館, 2001. 相模湾レッドデータ 貝類, 104pp.
愛知県科学教育センター, 1967. 愛知の動物. 222pp.
中山 清, 1980. 知多湾南部海域の貝類相. かきつばた, 6: 10-12. 名古屋貝類談話会.
木村昭一, 1999. 佐奈川河口域観察会報告. かきつばた, 25: 14-17. 名古屋貝類談話会.
和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島哲・山西良平・西川輝昭・五島聖治・鈴木孝男・加藤真・島村賢正・福田宏, 1996. 日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状. WWF Japan Science Report 3, 182 pp.

ヒモイカリナマコツマミガイ *Hypermastus lacteus* (A.Adams)

【選定理由】

本種は内湾域の砂礫干潟の底質中に潜って生息するヒモイカリナマコ（棘皮動物）の体内に内部寄生する微小な巻貝。本県でも干潟という生息環境自体が護岸工事や埋め立てで著しく減少しているため、本種と共生関係にあるヒモイカリナマコの生息地、生息数とも著しく減少したと考えられる。ヒモイカリナマコツマミガイがヒモイカリナマコに寄生している割合は5%以下で、結果として県内では極めて希少な貝類である。渥美半島北側の三河湾の1地点（愛知県, 2005）でのみ生息が確認された。2006年、2007年の現地調査でもかろうじて生息を確認した。和田ほか（1996）では危険にランクされている。

【形態】

殻高 3-5mm で殻は半透明白色で殻質は薄い。殻頂部はつまみ状に突出する。殻表は平滑で強い光沢がある。

【分布の概要】

【県内の分布】

上述したように、1地点でのみ生息が確認されている。生息地点数、生息数とも非常に少ない。

【世界及び国内の分布】

日本固有種。三浦半島以南、瀬戸内海に分布する。

【生息地の環境／生態的特性】

【選定理由】の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したような干潟の環境は破壊されているため、本種の生息場所、生息数とも減少したと考えられる。

【保全上の留意点】

上述の生息地は、アサリの母貝の保護のため地元漁協によって管理され、立ち入りが制限されており、良好な環境が保全されている。今後も、同様の保全が不可欠である。

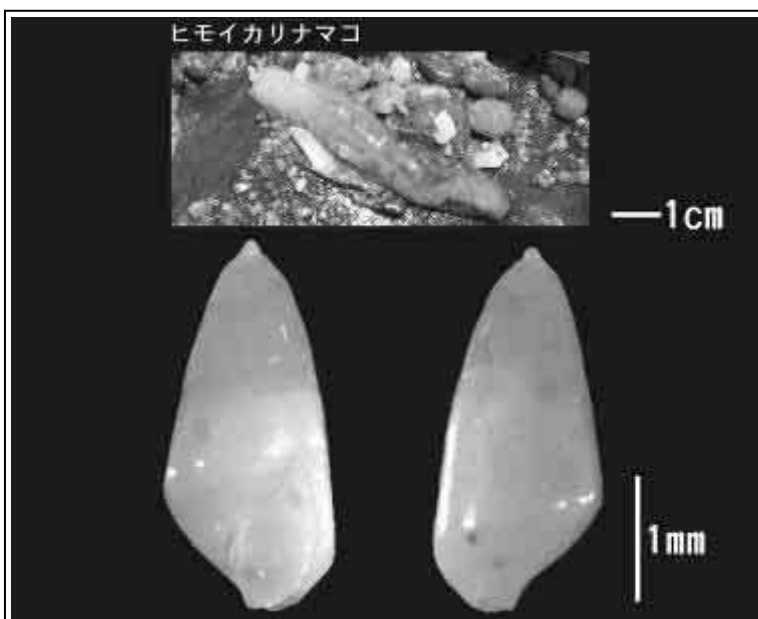
【特記事項】

今回新たにレッドリストに掲載された。

【引用文献】

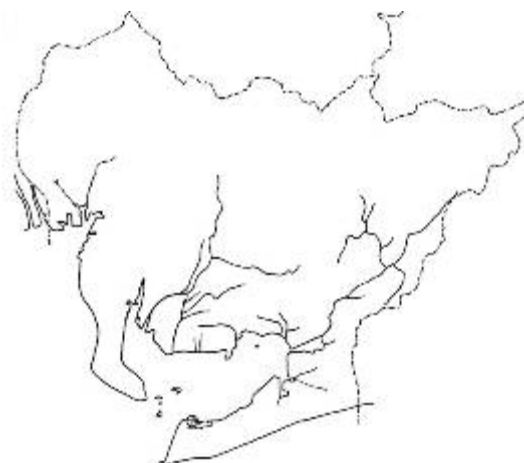
愛知県, 2005. 沿岸生態系保全の考え方－干潟生態系を中心として－.

和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島哲・山西良平・西川輝昭・五島聖治・鈴木孝男・加藤真・島村賢正・福田宏, 1996. 日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状. WWF Japan Science Report 3, 182 pp.



田原市福江漁港北側干潟, 2007年6月2日, 木村昭一 採集

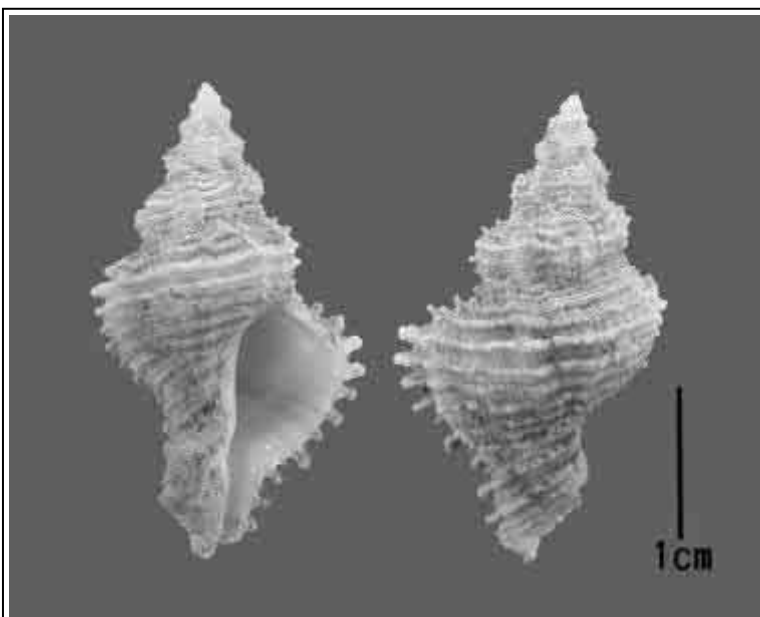
県内分布図



ヒラドサンゴヤドリ *Coralliophila jeffreysi* Smith

【選定理由】

本種は内湾の湾口部の潮下帯に生息するキサンゴ類に外部寄生する。本科の貝類は外洋性の種がほとんどで、本種は唯一内湾に生息する種であり、外洋には生息しない。本県では内湾域の潮下帯の環境は上部の干潟の破壊や浚渫、貧酸素水塊の発生、水質汚濁などで急速に悪化していて、この生息帯に棲む貝類相が著しく単純化している。本種も三河湾湾口部、知多半島内海沖の伊勢湾から少数の死殻が採集されているだけで生貝は採集されていない（中山,1980：木村,1996：木村,2000）。キサンゴ類は潮通しの良い内湾の岩礁に生息しており、このような環境は非常に少なくなっている。



南知多町内海沖水深 10-27m(ドレッジ), 2000 年 7 月 27 日, 木村昭一 採集

【形態】

殻高約 2.5cm の紡錘型の貝で、殻は厚く太い強い縦肋を持ち、鱗片状の突起が発達する。貝殻は淡褐色で殻口は白色。

【分布の概要】

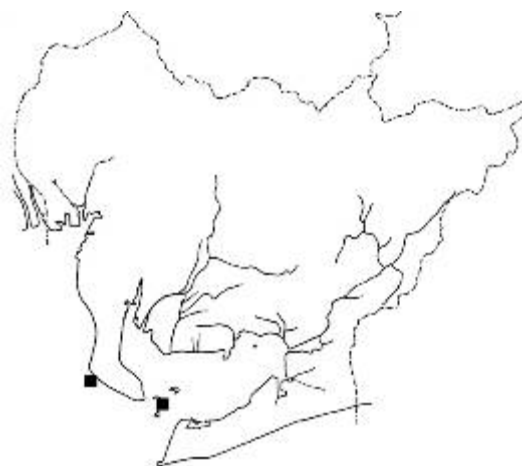
【県内の分布】

【選定理由】の項参照。

【世界及び国内の分布】

日本、朝鮮半島。国内では三河湾、伊勢湾、瀬戸内海、玄界灘に分布する。

県内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

【選定理由】の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

【選定理由】の項参照。

【保全上の留意点】

上述したように県内潮下帯の環境を保全する。

【引用文献】

木村昭一, 1996. ドレッジによって採集された日間賀島南部海域の底生動物. 研究彙報(第 35 報): 3-19. 全国高等学校水産教育研究会.

木村昭一, 2000. 伊勢湾・三河湾でドレッジによって採集された貝類(予報). かきつばた, 26: 18-20. 名古屋貝類談話会.

中山 清, 1980. 知多湾南部海域の貝類相. かきつばた, 6: 10-12. 名古屋貝類談話会.

マルテンスマツムシ *Mitrella martensi* (Lischke)

【選定理由】

本種は内湾奥の泥質干潟にすむ。本県でも干潟という生息環境自体が護岸工事や埋め立てで著しく減少しているため、本種の生息地、生息数とも著しく減少したと考えられる。本種は1960年代には三河湾奥（渥美湾）の干潟で普通に採集された（愛知県科学教育センター, 1967）が、近年では死殻も全く発見できない（藤岡・木村, 2000）。和田ほか（1996）では、絶滅寸前とランクされている。

【形態】

殻高約2cmの長い紡錘型の貝で、殻口は肥厚し、内唇にいぼ状突起がある。殻表は黄褐色で、不規則な褐色の縦帯をもつ。



福岡県柳川市沖(有明海), 1999年8月30日, 木村昭一 採集

【分布の概要】

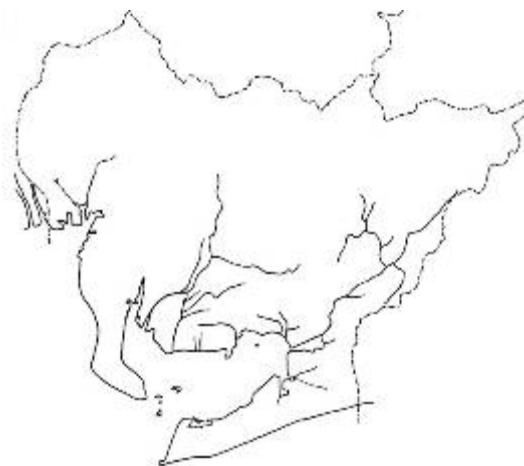
【県内の分布】

現在死殻でさえ採集できる場所はほとんどない。当然生貝も見られない。最も近年における死殻の採集報告は知多湾南部からである（中山, 1980）。

【世界及び国内の分布】

日本でのみ採集されている。国内では北海道南部以南から九州まで分布する。

県内分布図



【生息地の環境 / 生態的特性】

【選定理由】の項参照。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

上述したように県内では現在生息場所は確認されていない。近年死殻も採集されず、危機的な生息状況であり、絶滅した可能性も高い。

【保全上の留意点】

内湾の潮間帯の環境を保全する。干潟の保全や、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

【引用文献】

愛知県科学教育センター, 1967. 愛知の動物. 222pp.

藤岡えり子・木村妙子, 2000. 三河湾奥部汐川干潟の1998年春期における底生動物相. 豊橋市自然史博物館研究報告, 10: 31-39.

中山 清, 1980. 知多湾南部海域の貝類相. かきつばた, 6: 10-12. 名古屋貝類談話会.

和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島哲・山西良平・西川輝昭・五島聖治・鈴木孝男・加藤真・島村賢正・福田宏, 1996. 日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状. WWF Japan Science Report 3, 182 pp.

オガイ *Cantharus cecillei* (Philippi)

【選定理由】

本種は内湾から湾口部にかけての潮下帯砂礫底にすむ。本県では内湾域の潮下帯の環境は上部の干潟の破壊や浚渫、貧酸素水塊の発生、水質汚濁などで急速に悪化していて、この生息帯に棲む貝類相が著しく単純化している。本種は1960年代には比較的普通種であった（愛知県科学教育センター,1967）が、近年死殻すらほとんど採集できない（木村,1996：木村,2000）。

【形態】

殻高約4cmの紡錘型の貝で、殻は厚く縦肋が強く、生時には、殻表は緑褐色の殻皮で覆われる。蓋は革質で厚く、殻口を全てふさぐ。



南知多町日間賀島南沖水深5m(底刺網), 1994年7月5日,
木村昭一 採集(死殻)

【分布の概要】

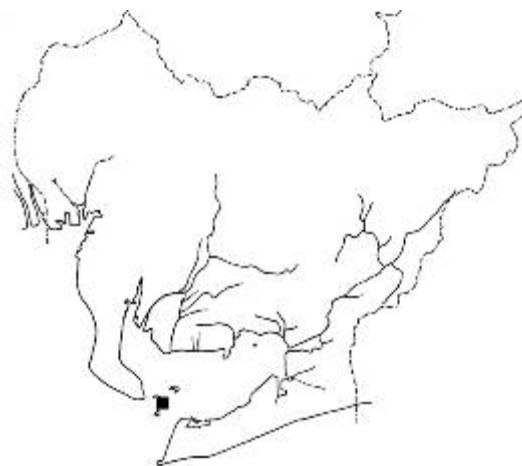
【県内の分布】

上述したように県内の潮下帯で近年全く生貝が採集されない。

【世界及び国内の分布】

日本固有種。房総半島以南から九州まで分布する。

県内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

【選定理由】の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したような生息環境の悪化のほか、本種についてはバイ（堀口,1998）の様に有機スズ化合物による雌の雄化により個体数が減少したのかも知れない。近年死殻もほとんど採集されておらず、危機的な生息状況である。絶滅した可能性もある。

【保全上の留意点】

内湾の潮下帯の環境を保全する。干潟の保全や、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

【引用文献】

愛知県科学教育センター, 1967. 愛知の動物. 222pp.

堀口敏広, 1998. インボセックス 巻貝類における雌の雄化現象. 海洋と生物, 117: 283-288.

木村昭一, 1996. ドレッジによって採集された日間賀島南部海域の底生動物. 研究彙報(第35報): 3-19. 全国高等学校水産教育研究会.

木村昭一, 2000. 伊勢湾・三河湾でドレッジによって採集された貝類(予報). かきつばた, 26: 18-20. 名古屋貝類談話会.

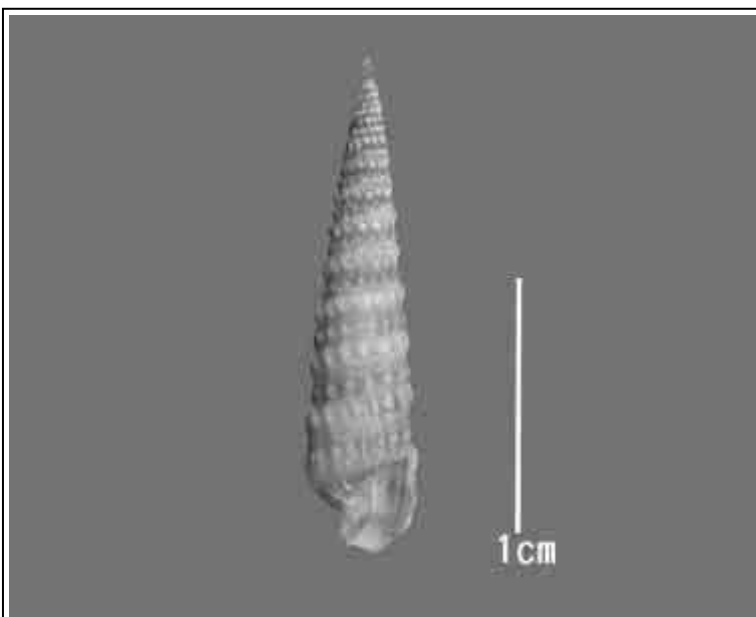
イボヒメトクサ *Granuliterebra bathyraphe* (Smith)

【選定理由】

本種は内湾から湾口部にかけての潮下帯砂泥底にすむ。本県では内湾域の潮下帯の環境は上部の干潟の破壊や浚渫、貧酸素水塊の発生、水質汚濁などで急速に悪化していて、この生息帯に棲む貝類相が著しく単純化している。本種も知多湾、三河湾湾口部、伊勢湾知多半島沖では死殻が少数採集されるが、近年ほとんど生貝が採集されていない（中山,1980：木村,1996：木村,2000）。

【形態】

殻高約 3cm の細長い円錐型の貝で、殻は厚くやや強い縦肋があり、いぼ状の結節がある。



南知多郡篠島西沖水深 6-8m(ドレッジ), 1994 年 10 月 11 日, 木村昭一 採集(死殻)

【分布の概要】

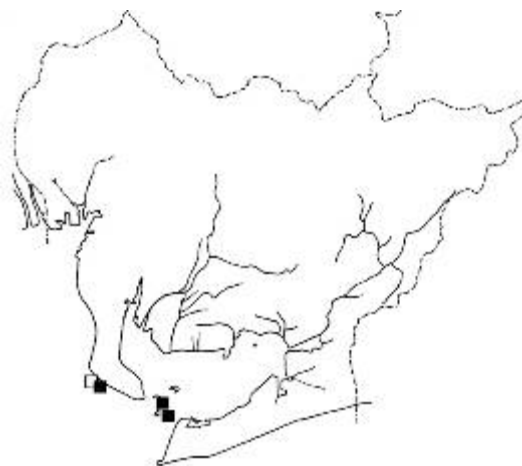
【県内の分布】

上述したように県内の潮下帯では、近年ほとんど生貝が採集されない。

【世界及び国内の分布】

日本、熱帯インド、西太平洋。国内では茨城県以南から九州まで分布する。

県内分布図



【生息地の環境 / 生態的特性】

【選定理由】の項参照。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

上述したような生息環境悪化のため本種の生息場所、生息数ともに減少していると考えられる。

【保全上の留意点】

内湾の潮下帯の環境を保全する。干潟の保全や、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

【引用文献】

木村昭一, 1996. ドレッジによって採集された日間賀島南部海域の底生動物. 研究彙報(第 35 報): 3-19. 全国高等学校水産教育研究会.

木村昭一, 2000. 伊勢湾・三河湾でドレッジによって採集された貝類(予報). かきつばた, 26: 18-20. 名古屋貝類談話会.

中山 清, 1980. 知多湾南部海域の貝類相. かきつばた, 6: 10-12. 名古屋貝類談話会.